

教育実践総合センター一年報



滋賀大学教育学部
Faculty of Education

2021年3月 第4号



目 次

教育実践総合センター年報 第4号

1 共同研究事業	1
1-1) 滋賀県における幼児の運動能力に関する研究 (2020年度)	(奥田 援史)
1-2) 小学校外国語科に関する研究	(大嶋 秀樹)
1-3) 理科教育に関する研究	(藤岡 達也)
1-4) 理科教育に関する研究 — 全ての児童が目指す姿を意識して取り組むことを通して —	(加納 圭)
1-5) 自ら学び、自分の言葉で表現できる子どもの育成	(長岡 由記)
1-6) 授業力向上を支える甲賀流OJT の在り方について : PDCA サイクル に基づく教科研修会の分析	(渡邊 慶子)
1-7) 親子の運動遊び促進のための啓発事業	(奥田 援史)
1-8) 一人ひとりの伝える力を高める授業づくり	(長岡 由記)
1-9) グローバル社会に生きてはたらく力をCLIL指導を通して育成する	(大嶋 秀樹)
1-10) 中学校の通級指導教室における指導・支援のあり方について	(窪田 知子)
1-11) 通級指導教室の子どもに対する協議運動面の指導に関する実践的研究 (4)	(川島 民子)
1-12) 確かな学力を身に付け、主体的に学ぶ生徒の育成	(畠 稔彦)
1-13) 幼稚園と特別支援学校での音さがし	(林 瞳)
1-14) 石山っ子わくわく親子で畠体験隊	(森 太郎)
1-15) 算数・数学教育実践研究セミナー	(畠 稔彦)
1-16) 義務教育現場を対象とした【声を鍛えるルーティントレーニング】 の作成・実施	(渡邊 史)
1-17) 知財創造教育の先進的な取り組みの開発	(糸乗 前)
2 出前講座	33
3 教職探究講座	43
4 教職臨床研究	45
5 情報教育研究	48

6 教育実習支援（その1） -----	50
7 教育実習支援（その2） -----	52
8 教職キャリア支援の取り組み -----	54
9 業務報告 -----	56

1 共同研究事業

1－1) 滋賀県における幼児の運動能力に関する研究（2020年度）

1. 事業名および担当者

事業名は、「滋賀県における幼児の運動能力に関する調査研究」であり、担当者は次のとおりである。
教育学部：奥田援史、滋賀県教育委員会：（主事）村部謙介。

2. 事業の目的

滋賀県内の幼稚園、保育所、認定こども園の園児（4歳児クラス及び5歳児クラス）を対象として、運動能力について調査する。

3. 事業の概要

1) 実施した内容

・調査実施園及び測定対象者数

滋賀県内の幼稚園、保育所及び認定こども園の117園を測定園とした。測定対象者は4、5歳児クラスの園児であった。分析対象とした幼児データは6,895人分である。

・調査内容

幼児運動能力テストを実施した。このテストは、25m走（秒）、立ち幅跳び（cm）、体支持持続時間（秒）、ボール投げ（m）、両足連続跳び越し（秒）、捕球（回）の6種目で構成されている。運動能力の測定については、各園で実施した。なお、実施方法に関するDVDを配布し、測定方法の周知を図った。

2) 調査結果

各テスト項目の測定値を5から1までの評定得点に換算した。評定得点の出現確率は、5点7%、4点24%、3点38%、4点24%、5点7%である。各評定得点を単純加算し、合計評定得点を算出し、その後AからEのグループごとの人数とその割合を求めた。下記の表がその結果である。男女ともに、運動能力の低いグループであるD及びEに属する者が多い傾向がみられる。

	男児				女児			
	4歳児		5歳児		4歳児		5歳児	
	人数	割合 (%)						
A	128	7.9	155	8.0	137	9.3	165	9.2
B	336	20.7	515	26.7	402	27.2	518	29.0
C	450	27.7	487	25.2	419	28.4	536	30.0
D	474	29.2	537	27.8	398	27.0	434	24.3
E	234	14.4	235	12.2	120	8.1	136	7.6

4. 今後に向けて

今年度は新型コロナ感染症の流行があったが、117園の協力を得て、貴重なデータを確保することができた。継続的な視点では、やや上昇傾向が認められる。
(奥田 援史)

1 共同研究事業

1－2) 小学校外国語科に関する研究

1. 事業名および担当者

事業名、及び担当者とそれぞれの役割は次のとおりである。

(1) 事業名

『小学校外国語科に関する研究』

「小学校外国語科におけるコミュニケーションを図る資質・能力の育成
—パフォーマンス評価における系統性、妥当性および信頼性向上の試みー」

(2) 担当者・役割

渡邊博三 (滋賀県総合教育センター) (研究員)

疋田かおり (滋賀県総合教育センター) (研究統括)

中川恵実子 (滋賀県総合教育センター) (事業統括、研究統括)

福井真千子 (東近江市立市原小学校長) (研究支援 (専門委員))

山岡千春 (滋賀県教育委員会) (研究支援 (専門委員))

野阪洋江 (大津市立仰木の里東小学校) (実践研究・授業検証 (研究委員))

梅本あづさ (彦根市立城東小学校) (実践研究・授業検証 (研究委員))

大嶋秀樹 (滋賀大学) (トータルアドバイザー)

2. 事業の目的

本事業の目的は次のとおりである。

目的

令和2年度から的小・中・高・特別支援学校での改訂学習指導要領にもとづいた新教育課程の順次
の実施を控え、外国語（英語）教育における「学びの系統性」を踏まえた、小・中学校の児童・生
徒の英語の学びを滑かにつなげる授業づくりに向け、令和元年度来、実証的研究を進めてきた。令
和2年度の研究では、令和元年度の指導と評価が一体となった授業計画とそれにもとづいた授業実
践についての研究を受けて、小学校外国語科（英語）における、児童の英語による活動の評価（パ
フォーマンス評価）についての研究に取り組むことで、小学校の児童の英語によるコミュニケーションの資質・能力の育成に資することを目的とする。

3. 事業の概要

本事業は、本学教育学部の地域教育研究支援事業として、滋賀県総合教育センターが所轄する令和2
年度の事業、『小学校外国語科に関する研究』にかかるものである。

実施した事業内容、その成果・発信の概要は次のとおりである。

(1) 授業研究会

研究にあたっては、授業研究会を開催した。授業研究会は、それぞれ、大津市立仰木の里東小学校、彦根市立城東小学校で実施した。

(2) 研究発表会

1年間をかけて行ってきた研究成果は、資料としてまとめ、その内容は、令和3年2月11日開催の滋賀県総合教育センター「第63回研究発表大会」で発表・報告した。研究発表会は、午前と午後の2部構成で行われ、年度初め来の新型コロナウィルスの感染拡大に伴い、令和2年度は、オンラインで開催することとなった。

(4) 研究の成果と発信

1年間をかけての研究の成果は、実践研究論文としてまとめ、滋賀県総合教育センターのホームページから、公開・発信される。

4. 今後に向けて

本事業は、地域の教育研究機関である滋賀県総合教育センターの先生方が主体となって、滋賀県の小・中学校の現職教員の先生方と一緒に、令和2年度からの小・中・高・特別支援学校での新教育課程の順次実施を控えての、外国語（英語）教育における「学びの系統性」を踏まえた小・中学校の児童・生徒の英語の学びを滑かにつなげる授業づくりを、令和2年度は、小学校外国語科（英語）における、児童の英語による活動の評価（パフォーマンス評価）という視点から、児童・生徒の英語によるコミュニケーションの資質・能力の育成を図ることを目的に進めた研究である。1年間の先生方の研究が、これから英語教育の先鞭となって、滋賀の地域の児童・生徒のみなさんの学びの充実、滋賀県の小・中学校の先生方の教育の充実に資することを願っている。

（疋田かおり・中川 恵実子・大嶋 秀樹）

1 共同研究事業

1－3) 理科教育に関する研究

1. 事業名および担当者

事業名は、滋賀県の高校理科に関する実践研究であり、担当者は以下のとおりである。

教育学系：藤岡達也（代表・トータルアドバイザー）

滋賀県総合教育センター：山本毅（主幹）、三木崇史（係長）、隼瀬憲一郎（研修指導主事）、中川聖良（研究員）、門坂エリ（研究員）

滋賀県教育委員会事務局高校教育課：堀浩治（指導主事）

滋賀県立八日市高等学校：嶋貫朝美（教諭）、滋賀県立草津高等学校：粥川慎平（教諭）

2. 事業の目的

今年度は、これまでの2年間の成果を踏まえ、「科学的に探究するために必要な資質・能力の育成を目指した高等学校理科の授業改善III－「考察・推論」に重点を置いた探究の過程を踏まえた学習の実践とループリックを活用した学習評価を通して－」をテーマとして取り組んだ。2校の県立高等学校の協力をもとに、「考察・推論」に重点を置いた探究の過程を踏まえた学習の実践とループリックを活用した学習評価の一体化に取り組むことで、高等学校理科の授業改善を図り、科学的に探究するために必要な資質・能力の育成を目指した。具体的には、ループリック評価を踏まえ指導案に基づいた実践授業を複数回行なう。授業では、ループリックを活用して自己評価や相互評価を繰り返して、「考察・推論」する力の育成につなげ、探究的な学習活動を充実させる。このような取組により、高等学校理科の授業改善を図ることができ、科学的に探究するために必要な資質・能力の育成につながることが期待できる。

3. 事業の概要

最初に、これまでの学習状況や学習に対する理解度、探究の過程を踏まえた学習、学習評価の取組に関する設問により、生徒の実態を把握する。これらを踏まえながら、実験観察を取り入れた探究の過程を重視した学習を展開し、各学校や生徒の実態に応じたループリックの達成基準を検討する。



総合教育センターでループリックによる達成項目等の検討を重ね、県立草津高等学校、八日市高等学校において、それぞれ各校の研究協力員と共に目的の実現のための授業を展開した。つまり、各学校の理科（物理）の中で、「考察・推論」に重点を置いた探究の過程を踏まえた学習の実践において、学習課題をパフォーマンス課題として提示し、探究の動機付けを図った。それによって、生徒は学習課題を与えられたものとしてではなく、能動的な姿勢を持って、探究の過程全体を通して主体的に取り組む姿が見られた。特に「考察・推論」の過程においてループリックを活用することにより、物理現象を様々な観点から「考察・推論」する力を育成することにつながった。ループリックを基にした自己評価、さらには学習者同士の相互評価の中で「チェックシート」を活用することにより、学習者自身が自発的に知識を相互に補完し、学習内容を振り返り、知識の定着とともに「考察・推論」を深めることができた。さらに、本単元での学習事項をこれまでの学習内容と関連付けることを促したことにより、ややもすると抽象的に捉えがちな現象を本質の理解につなげることができたと考えられる。

＜総合教育センターにおける研究発表及び課題について＞

例年実施されているように、本年度も2月12日には研究協力校の教員も参加し、これまでの研究員の最終発表を行なう予定であった。しかし、今年度に限ってはコロナ禍の影響を受け、オンデマンド配信で発表成果を公表することとなった。そのため、研究員の取組、2校の研究協力員による学習者の変容などについて、直接県下の高校理科教員と質疑応答ができず、一方的な説明になった懸念もある。自分の方も、オンデマンド配信となつたため、どれくらいの視聴があったのか、本研究でのループリックの達成基準の意味がどれくらい理解されたか、疑問は残る。しかし、配信後、質問等も受け付けているので、積極的な感想・コメントを期待したい。



4. 今後に向けて

近年、学習評価の方法としてループリック評価が注目されている。しかし、ループリックによる評価基準の設定は必ずしも容易ではない。また、評価としては、学習指導要領での観点別評価があり、日常的にはこの評価によって、成績評価がなされる。特に高等学校においては、令和4年度から新学習指導要領による授業が開始される。これまでの4つの観点から3つの観点に代わったこと、それらのねらいである資質・能力育成のために「主体的・対話的で深い学び」（アクティブラーニング）が期待されている。「観点別評価」を用いながらも「ループリック評価」はなぜ重要であるのか、そもそもループリックは「基準」であり、「規準」とはどのように違うのかは、学校教育現場でさえも理解されていないこともある。本研究のように具体例を示しながら、その重要性を広めることは今後の課題である。

ループリック評価を用いることによって、今回の研究で明らかになった、学習者自身が自分をメタ認知的に捉えることができ、自分の課題や学習の方向性を自ら理解できることの意義は大きい。科学的な見方・考え方が、今後ますます必要な時代に、「生きる力」の育成としても期待できるからである。

（藤岡 達也）

1-4) 理科教育に関する研究（加納圭）

1. 事業名および担当者

事業名：理科教育に関する研究

「問題を科学的に解決することに児童が主体的に取り組み、問題解決の力を養う小学校理科の授業づくり」

—全ての児童が目指す姿を意識して取り組むことを通して—

担当者：滋賀県総合教育センター研究員 門坂 エリ、滋賀大学教育学部教授 加納 圭

2. 事業の目的

小学校学習指導要領(平成29年告示)において、理科の目標は、自然の事物・現象についての問題を科学的に解決するために必要な資質・能力を育成することとされている。そして、育成にあたっては、自然の事物・現象についての理解を図り、観察、実験などに関する基本的な技能を身に付け、問題解決の力を養い、自然を愛する心情や主体的に問題解決しようとする態度を養うこととされている。

本研究では、児童の発達段階に応じた児童向けの達成基準を作成し、児童に示すことで、児童が目指す姿を意識しながら問題を科学的に解決することに主体的に取り組み、問題解決の力を養うことを目指す。加えて、児童が国語科や算数科で身に付けた力を理科の学習に活用できるような手立てを追究していく。そうすることで、全ての児童が「分かる」「できる」を実感しながら学習に主体的に取り組み、問題解決の力を養えるようになることを目指す。

3. 事業の概要

(1) 児童向けの達成基準の活用

問題解決の過程の中で、問題解決の力と主に関わりのある「問題の見いだし」「予想・仮説の設定」「検証計画の立案」「考察」の場面を観点として設定し、問題解決の活動に取り組む際の模範的な行動を表にまとめた。これを「理科の達人」と名付けて、児童に示しながら実証授業を実施した(図1)。

例えば、第5学年「ふりこのきまり」の学習では、振り子が1往復する時間を変化させる要因について、条件を制御しながら調べることが必要になる。そこで、児童向けの達成基準の中の「計画の達人」を活用しながら授業を進めた。指導者は、条件を制御して計画できている児童のノートを「計画の達人」の内容と照らし合わせながら学級全体に紹介した。さらに、各自が考えた計画を基にグループで話し合いながら方法や条件

理科の達人			
達人!	問題見つけの達人	予想の達人	計画の達人
★★★	自然や身近な出来事を比べることで、ちがうところや同じところをもとにして問題を見つけ、表現する。	学習したことや生活での経験を結びつけて、予想とその理由を表現する。さらに、友達の予想と自分の予想を比べる。	予想をもとに、観察、実験の条件に気をつけながら、実際にできる方法を計画し、表現する。
★★★	自然や身近な出来事の中で、疑問に思ったことを表現する。	学習したことや生活での経験を結びつけて、予想とその理由を表現する。	予想をもとに、実際にできる観察、実験を計画し、表現する。
★	疑問に思ったことを表現する。	予想とその理由を表現する。	予想をもとに、観察、実験を計画し、表現する。

図1 児童向けの達成基準(第5学年用)

を決め、再度、各自が「計画の達人」を参照しながらノートに実験計画を整理して表現するようにした。その結果、「変える条件」と「同じにする条件」に気を付けて実験の計画を立てられるようになった姿が見られた。達成基準を活用することで、児童自らが「条件を制御する」という理科の考え方を働かせながら、検証計画を立案できるようになったことがうかがえた。

(2) 国語科や算数科で身に付けた力を活用できる理科の授業構想と実践

問題解決の過程の各場面において、根拠を示しながら考えを表現する学習活動を充実させるために、児童が理科で身に付けてきた力だけでなく、国語科や算数科で身に付けてきた力を活用できる手立てを講じた。

例えは、国語科で身に付けた力の活用については、予想したことや考察したことを整理するために、2色の付箋紙を用いて自分の考えとその根拠を区別して書くようにした(図2)。この手立てを継続することにより、児童は、自分の考えと根拠を区別して書き表すことが定着し、

児童向けの達成基準の「予想の達人」や「考察の達人」に示された行動に取り組みやすくなった。

算数科で身に付けた力の活用については、集めたデータを基にして、より妥当な考えをつくりだすために適切な表やグラフを用いる手立てを講じた。複数グループの実験結果を一つの表やグラフにまとめて比べることで、得られた結果の特徴を視覚的に判断することができ、考察しやすくなった。算数科で身に付けた力を活用することで、「考察の達人」に示されたいくつかの結果を比べたり結び付けたりして考察することができた。

(3) 「学力・学習チャレンジアプリ」の活用

実証授業を実施した2学級の児童の学力の変容を見るため、6月と11月に、滋賀大学教育学部の加納圭教授らが開発した学力判定アプリ「学力・学習チャレンジアプリ」を活用した。児童にとって、自分の得意教科や不得意教科を把握し、自身の成長や課題を認識する機会となった。このアプリでは、3教科(理科、国語科、算数科)の学力の向上を見取ることができ、児童向けの達成基準の活用を促したり国語科や算数科で身に付けた力を活用できる手立てを講じたりしたこと、国語科や算数科での学びとの相乗効果があったと考えられる。さらに、理科の学力が上がったことから、本研究の取組が問題解決の力を養うことに有効であったと推測できる。

4. 今後に向けて

本研究では、目指す姿を明確にした児童向けの達成基準を手掛かりとすることで、児童は問題を科学的に解決することに主体的に取り組むことができ、問題解決の力を養うことができた。また、指導者が国語科や算数科の学習とのつながりを意識して手立てを講じることで、児童は各教科で身に付けた力を理科の学習に生かすことができ、問題解決の力の育成につながる授業づくりができた。今後、達成基準の汎用性を高めるために、児童の実態に即した達成基準を作成する手法を構築したり、他教科の学びを生かす学習を目指して指導者や児童が学びのつながりを実感できるよう、より具体的な手立てについて検討したりする必要がある。

(門坂 エリ・加納 圭)

1－5) 自ら学び、自分の言葉で表現できる子どもの育成

1. 事業名および担当者

事業名は「自ら学び、自分の言葉で表現できる子どもの育成」であり、担当者は以下の通りである。

甲賀市教育研究所：福永 佐栄子(所長)，田中 由紀子(研究員)

教育学部：長岡 由記(学部教員)

2. 事業の目的

本事業の目的は、自分の言葉で表現できる国語科授業をつくるために、教職員がチームを作り授業を計画・実施し、児童の学びの姿を教職員と授業記録に残し、その分析を行うことで授業改善のための要点を明らかにすることである。これまで、「読むこと」における「考えの形成」を視点にして、自分の思いや考えを書いて学びを拡げ、深められる授業づくりを行ってきた。そこで、これまでの研究の成果を踏まえ、本事業では、児童が主体的に自分の思いや考えを表現し、学び合おうとする学習集団・授業づくりについて探究することをねらいとする。そのために、児童が主体的に学べるような授業づくりについて考え、それを基に授業実践し、記録を取って振り返ることとする。本事業は、甲賀市と大学の連携によって、同市の授業研究体制を構築するための取組である。当初は授業研究会に学生も参加する予定であったが、感染症対策等のため授業記録の視聴を代替措置とし、授業の様子を視聴することで児童の実態について把握するとともに、授業づくりと授業分析の手法を実践的に学ぶ機会とした。

3. 事業の概要

2学期に実施される研究授業の指導案検討会は、8月18日に実施した。授業研究会は、9月11日（研究授業Ⅰ）と10月2日（研究授業Ⅱ）に開催された。以下、授業研究会の概要を記す。

研究授業Ⅰ 作品の世界を捉え、かに目線で「谷川の写生歌」を読もう

(教材名「やまなし」「イーハトーヴの夢」光村図書6年)

単元目標は、「作品をさまざまな視点から捉え、五月と十二月のかにの描かれ方に着目して、谷川の底の世界を写生歌に表すことができる」と「『イーハトーヴの夢』を読み、宮沢賢治が『やまなし』に込めた思いや生き方について考え方や感想を共有し、自分の考えをまとめることができる」である。本時は、全9時間の6時間目であり、目標は「『十二月』の谷川の底でかにの兄弟や親子が見たり、感じたり、考えたりしたこと想像し、写生歌に表すことができる」である。

授業では、まず会話、色、オノマトペや比喩といった表現の工夫に着目するための観点が「物語文の呼吸」として提示された。その後、児童それぞれが教材文を読み、「心ひかれた一文」を見つけ、その選定理由をワークシートに記入していた。全員が見つけた一文とその理由を確認した後、その一文から写生歌に入れたいキーワードを選定し、そのキーワードを取り入れながら写生歌の創作が行われた。なお、目標には「かに目線で」という条件が記されているが、授業ではその条件は示されなかつたため、第三者の視点から写生歌を創作する児童も多かった。例えば、「まもなく、水はサラサラ鳴り、天井の波はいよいよ青いほのおを上げ、やまなしは横になって木の枝に引っかかって止まり、その上には、月

光のにじがもかもか集まりました。」という一文を選んだ児童は、「冬の月スポットライトやまなしにキラキラ集まりスターのようだ」という写生歌を創作していた。学習者は、音（文字）数の制限に悩みながらも情景を想像し、表現を工夫しながらイメージ豊かな写生歌を詠んでいた。一方で、写生歌を創作するという目的を強く意識し、心ひかれた一文ではなく「写生歌」が作りやすそうという理由で一文を選ぶ児童や、語や文節レベルに着目して創作し、文意が捉えきれていない児童もいた。授業研究会では、「イーハトーヴの夢」を読んでから「やまなし」を読む授業展開や、より多く児童の発言を取り上げる機会を確保するための改善案等が参観者から提示された。本授業を通して、学習者それぞれの意見や考えを共有したり吟味したりする時間を確保すること、また目標と言語活動との整合性を吟味すること等が授業改善の方向性として見えてきた。

研究授業Ⅱ 「4年1組 伝統工芸ガイドブック」を作ろう

(教材名「世界にはかる和紙」「伝統工芸のよさを伝えよう」光村図書4年)

「4年1組伝統工芸ガイドブック」とは、児童一人一人が日本の伝統工芸のよさや特徴について百科事典などで調べ、その要約文をA4の紙一枚に書き記したものを作り、クラスで1冊の本にまとめたものである。

本单元で付けたい力は「教材文を読み、和紙のよさに関わる言葉や文を見付けて要約し、他の伝統工芸のよさや特徴について本や資料を使って調べ、伝えたい内容が相手に伝わるようにまとめることができる」力である。主な単元目標は、「目的を意識して、中心となる語や文を見付けて要約することができる」「自分の考えとそれを支える理由や事例との関係を明確にして、書き表し方を工夫することができる」である。本時は、全16時間の5時間目であり、目標は「自分が感じた和紙のよさを伝えるために、筆者が述べている和紙のよさを読み取って要約に必要な言葉を見付けることができる」である。授業では、まず教材文の「中」の前半を詳しく読み、本文に書かれている大切な語や文に線を引き、そこを中心にペアで交流した。次に、その箇所を中心に特にすごいと感じた和紙のよさを全体で交流し、要約を行う際に、欠かせない言葉を絞り込んでいった。本時の目標と活動設定によって、自分がすごいと思ったことを端的にまとめることと、筆者が伝えようとしている和紙の良さを端的にまとめると二つの方向性に要約の目的が分かれる場面もあったが、児童は要約に必要だと思う言葉を見つけてその理由を説明するとともに、自分が選んだ言葉を用いて要約文を作成した。



4. 今後に向けて

本年度の研究授業は、教材文や百科事典などに書かれていることを読み取り、それらを踏まえた上で自らの思いや考えを工夫しながら書くという点において共通している。児童は、取り入れるべき言葉を吟味しながら、自らの伝えたいことを表現するためにはどうしたら良いのかについて熱心に考えていました。この姿を大切にするとともに、何のために誰に向けて書くのかという目的や相手を意識した活動設定の仕方について、さらに検討を重ねていきたい。

(長岡由記・田中由紀子)

1－6) 授業力向上を支える甲賀流OJT の在り方について ：PDCA サイクルに基づく教科研修会の分析

1. 事業名および担当者

本事業は、「授業力向上を支える甲賀流OJTの在り方について：PDCAサイクルに基づく教科研修会の分析」であり、次の担当者によって遂行された：【大学担当者】渡邊慶子（教育学部准教授・数学教育学），【連携先機関】甲賀市教育研究所，【連携先担当者】田中由紀子（甲賀市教育研究所・研究員）

2. 事業の目的

本研究の目的は、主体的に学び続ける教職員を育むために、子どもの資質・能力向上につながる OJT (On the Job Training) 研修の在り方を、教科指導における PDCA (Plan-Do-Check-Action) サイクルを導入して探究することであった。

2019年度から「授業力向上を支える甲賀流OJTの在り方について」という主題で、教職員の人材育成について研究を始めてきた。そこでは、授業づくりや教材研究について計画的・共働的な授業研究を進め、教職員が主体的に教育目標を焦点化したり、授業づくりに生かしたりするための具体的な手立ての不明確さが課題として残された。

そこで、2020年度は教科の学習指導研究におけるPDCAサイクルに沿って、教育活動を改善するための取り組みを研修の具体的な手立てとした。教職員の教育目標の達成のための指導計画の立案やそれに基づいた指導の実施、そしてその検証・評価における自治体の役割や研修の在り方について、研修会の発話分析などを通じてより一層明確にすることを事業の目的とした。

3. 事業の概要

(1) 「授業力向上を支える甲賀流OJT」とその活性化に向けて：自治体の役割と研修の在り方への着眼

甲賀市教育研究所では、2019 年度より授業研究に焦点を絞って、市内の教職員でチームをつくって研究を行っている。今年度は、教職員自身の目標の明確化と持続性のある手立ての確立を目指して、研究の PDCA サイクルを生かした教職員の課題解決を視点とした。研究推進委員として、教科・学校・世代の枠を越えたメンバーが集まり、同年齢のグループと異年齢のグループを編成した。また、それぞれのグループに、研究協力委員（大学教員）と専門委員（小中学校長）が入り、チームを構成した。教職員は、研究の PDCA サイクルに沿って個々の目標（私のチャレンジ）をチームで共有し、指導案検討・研究授業・授業研究会を経て、教育目標達成の検証・評価がなされた。

(2) 授業研究

本研究は、研究組織全体による「1 学期授業研究会」を実施したことに加えて、次の日程で授業実践が計画され、その日程に合わせて教育研究所のスタッフ（主に上記連携先担当者）と授業実施者が打ち合せをして授業が実施されている。その各々の授業後に授業研究会が行われ、大学担当者が参加した。さらに、適宜「研究推進委員会」が開催され、研究全体について遂行状況が報告されたり、微調整されたりしている。これらの研究活動は次の日程で行われた。

月	研究実践（□教材・授業の事前検討など／■授業実践・事後検討会／◎委員会など）
2020 年 4 月	◎研究の構想／研究推進計画の立案

5月	◎研究推進委員会（1）
6月	◎研究チームの結成
7月	□授業実践を通しての甲賀流 OJT①「理科：植物の発芽と生長（小5）」「道徳：みんなが楽しく（小3）」「道徳：自分の心に誠実に（小5）」
8月	□学習指導案検討会（教材検討会）／◎研究推進委員会（2）（3）
9・10月	□授業実践を通しての甲賀流 OJT②／■「道徳：やっぱり、やめよう（小3）」
11月	■「理科：振り子のきまり（小5）」
12月	■「道徳：相手の立場に立って（小5）」
2021年1・2月	◎研究推進委員会（4）：研究の総括
3月	◎研究紀要の発行と配布

（3）大学院生を加えた共同研究活動の実際

本年度は新型コロナウィルス感染予防対策のため、研究期間中全般に渡って学生・院生による授業参観の機会を設けることがかなわなかった。そのため、当初の研究計画を一部変更して、大学院生は実際に得られた授業に関するデータを分析することとし、その分析結果を研究に活用することになった。その結果、大学院生は主に2つの事項でこの研究に参加した。

一つ目は、授業実施前の学習指導案を大学教員とともに分析したことである。授業実施前に学習指導案が大学教員に送付されていたので、大学生は授業を実施する教諭が授業実施前にどのような内容を重視し、それをどのように児童と共有したいと考えているのかを読み取る作業をした。二つ目は、授業実施後に授業参観に参加した大学教員の授業記録と授業後の検討会記録に基づいて、授業実施後のチームメンバー（特に、異なる年齢層グループ内の若年齢層教諭と授業を実施した教諭）の授業知が変わったかどうか、そしてどのように変わったか、などを検討した。

これらの分析結果は、大学教員を介して研究グループ全体へと伝えられ検討された。更に大学院生にとって実際のデータを用いて質的分析をするという経験は、授業分析の方法に関する技術・知識の獲得ならびに精錬に直結しており、修士論文の作成に大きく貢献した。

4. 今後に向けて

本事業では「授業力向上を支える甲賀流OJT」とその活性化に向けて2019年度より授業研究の内容・方法・研究体制に着目し、主に年齢層や専門科目のバランスをとりながらチームをつくって研究を行ってきた。その際、自治体の役割と教員研修の在り方を明らかにすることへも着目してきた。

今後は、研究チームの編成を様々に変えた教員研修のPDCAサイクルの方法を構築することが課題の一つとなるだろう。教員研修の環境として、小中一貫教育を強化する観点から異種校（例えば、小学校と中学校）の教師たちによる「合同研修」のスタイルがより一層充実されなくてはならない。特に小学校の高学年に専科を担当する教員が配置されることも見据えて、自治体の教員研修体制を改めて見直すとともに、適切な研究チームを編成してそのチーム内のPDCAサイクルを主軸とする議論を丁寧に分析できるような研究体制を模索することが求められる。

引用・参考文献

甲賀市教育研究所（印刷中）令和2年度 研究紀要 第16号 甲賀市教育研究所

（田中由紀子・渡邊慶子）

1-7) 親子の運動遊び促進のための啓発事業

1. 事業名および担当者

事業名は、「親子の運動遊び促進のための啓発事業」であり、担当者は次のとおりである。

- ・教育学部：奥田援史。
 - ・草津市子ども未来部幼児課 課長 前田典子。

2. 事業の目的

親子運動遊び促進のための遊具（教材）を開発し、その効果を検討すること。

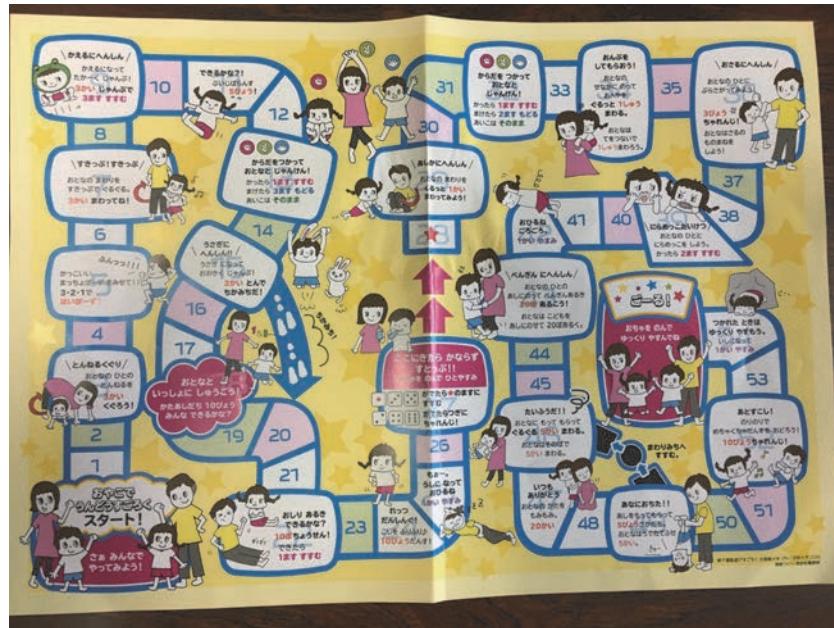
3. 事業の概要

- ・実践園：草津市山田こども園及び第四保育所。この他、東近江市の認定こども園等でも実施した。
 - ・先行研究の知見等を参考にし、「親子運動遊び双六」を開発・作成した。その後、実践園において、「親子運動遊び双六」に関するアンケート調査結果を実施した。約400人の幼児（保護者）に配布し、実践していただき、保護者にアンケートへの回答を任意で依頼した。作成した双六は以下のようなものである。

4. 調查結果

以下の意見・感想を参考に、改善していきたい。保護者用アンケートの主な結果は以下である。

- ・久しぶりに親子でキンシップがとれて、楽しかった。
 - ・きょうだいで何度も楽しむ姿があった。
 - ・5歳の子どもには少し簡単な課題であった。
 - ・何度か遊ぶと、それ以上遊ぶことはなかった。



(奥田 援史)

1-8) 一人ひとりの伝える力を高める授業づくり —相手を意識して書く・話す力につけるために—

1. 事業名および担当者

事業名は「一人ひとりの伝える力を高める授業づくり—相手を意識して書く・話す力につけるために—」であり、担当者は以下の通りである。

大津市立小松小学校：西松 秀樹（校長），石垣 聖子（研究主任）

教育学部：長岡 由記（学部教員）

2. 事業の目的

本事業の目的は、一人ひとりの伝える力を高める授業づくりのための要点を明らかにすることである。昨年度、説明文を根拠に基づいて読み取り、少人数での話し合いで学びを深めるという取り組みを行ったところ、友達の意見と自分の意見を比べて述べる力、論理的に書く力に課題があることが見えてきた。そこで、本事業では自分の考えと友達の考えの共通点や相違点を見つけつつ比較し、それを伝える力（書く・話す）の育成を目指した研究を行う。具体的には、教職員を低・中・高学年の3つの部会に分け、それぞれの部会を中心として、研究テーマについての教材研究・学習指導案づくり・事前授業・公開授業・事後指導・研究の総括などを行う。当初の予定では、授業研究会に学生も参加する予定であったが、感染症対策等のため授業記録の視聴を代替措置とし、授業資料を分析することで授業づくりについて実践的に学ぶ機会とした。

3. 事業の概要

4月 17 日 研究の目的・内容の確認	11月 13 日 研究授業Ⅱ（第4学年）
8月 20 日 研究に向けての夏季研修会（動画資料）	11月 18 日 授業検討会、学習指導案の検討③
10月 12 日 授業検討会、学習指導案の検討①	11月 18 日 研究授業Ⅲ（第2学年）
10月 23 日 研究授業Ⅰ（第5学年）	1月 20 日 研究の総括（校内検討）
11月 4 日 授業検討会、学習指導案の検討②	2月 1 日 研究の総括（担当者による最終検討）

【夏季研修会】

校内研究会では、研修動画資料を視聴しながら、授業づくりを行う上で、①一人の児童が安心して発言できる学習環境を作ること、②考える「対象」を明確にすること、③学習者自身が言語活動の価値づけをする機会を設定することの3点に留意することを確認した。

研究授業Ⅰ グラフや表を用いて暮らしについての自分の考えを書こう

（教材名「固有種が教えてくれること」「グラフや表を用いて書こう」光村図書5年）

主な単元目標は、「筆者の説明の工夫について話し合ったり、統計資料から必要な材料を見つけ、それらを根拠に自分の考えを伝えたりすることができる」である。研究授業は、全11時間の6時間目の授業であり、目標は「資料と対応した文を本文から見つけ出し、資料を使って伝えたいことを「初め・中・終わり」でまとめることができる」である。授業では、まず教材文の前時に用いた資料を用いて筆者が伝えたかったことを振り返り、次に本時の2つの資料と対応する文を見付けて線でつないで確認する作業が行われた。その後、「初め



1 共同研究事業

・中・終わり」の構造を確認し、本時の資料を用いて児童が自分なりに3段落構成で教材文をまとめ直すという学習が行われた。児童は3段落構成を意識し、接続語や語尾の用い方を工夫しながら書きまとめていた。文章全体における当該部分の役割や、三段落構成にし直すことで児童は何を学ぶのか等について活動設定の段階でさらに吟味すると、振り返りの観点の明確化にもつながるのではないかと考える。

研究授業Ⅱ 中心となる語や文を見付けて要約し、調べたことを書こう

(教材名「世界にほこる和紙」「伝統工芸のよさを伝えよう」光村図書4年下)

主な単元目標は、「日本の伝統工芸について進んで情報を収集し、自分の考えとそれを支える理由や事例との関係を明確にして、友だちに分かるように要約したり書き表したりすることができる」である。研究授業は、全19時間の10時間目であり、主な目標は「目的を意識して、中心となる語や文を見付けて要約することができる」である。授業では、本文を読んだことがない人にも内容が分かるように要約することを確認



した上で、グループで「初め」「中」「終わり」のまとまりごとに要約した文章から、中心となる語や文を友だちと出し合って整理する活動が行われた。中心となる語や文は、上の写真のようにホワイトボードに書き込み、それらをクラス全体で確認してから各自で教材文を200字程度に要約した。グループで一度文章のまとまりごとに要約してから文章全体を要約するという段階性があり、また用いたい語や文を確認してから要約するという学習過程が設定されていたことにより、多くの児童が迷うことなく要約文を書き進めていた。学習の振り返りでは、「筆者の伝えたいことが入っている」「削っているのに分かりやすい」という発言があった。用いたい語や文を選ぶことはできるが、それらを用いて文章を書くことが苦手な児童に対する個別の指導法については、継続して検討していきたい課題である。

研究授業Ⅲ せつめいのしかたに気をつけて読み、それをいかして書こう

(教材名「馬のおもちゃの作り方」「おもちゃの作り方をせつめいしよう」光村図書2年下)

主な単元目標は、「順序を捉えたり、文章と写真を対応させたりして説明文を読み、順序や内容がよくわかるように書くことができる」である。研究授業は、全11時間の7時間目の授業であり、目標は「作り方がわかるように順序を意識して説明文(どんぐりごまの作り方)を書くことができる」である。授業では、生活科で実際に作った「どんぐりごま」の作り方を、保護者に説明するための文章を作成する学習が行われた。



指導者は、分かりやすい文章を書くときのポイントとして、3点(①順序がわかる言葉を使う、②親切ポイントを書く、③一文を短くする)を提示し、児童は「まず」「つぎに」「それから」「さいごに」という接続詞を用いて、作り方を説明する文章を4段落構成で書いた。特に、「つまようじが長すぎるとバランスをとりにくくなってしまうから、はさみで切れます」など、自分の経験に基づいた「親切ポイント」を一人一人が熱心に考えることで、工夫が盛り込まれた説明文になっていた。

4. 今後に向けて

児童が試行錯誤しながら書き進めていくためには、何の目的で、誰に向けて、何を用いてどんなことを伝えるのかといった書く場や状況を意識できるようにすることが重要である。伝えたい思いを大切にしながら、書く場の設定について継続して検討していきたい。

(長岡 由記・西松 秀樹)

1-9) 「グローバル社会に生きてはたらく力を CLIL 指導を通して育成する

1. 事業名および担当者

事業名：「グローバル社会に生きてはたらく力を Content and Language Integrated Learning（以下 CLIL）を通して育成する—内容指導、言語指導、思考活動、協働の学び、を有機的に結び付ける—」

担当者：滋賀大学教育学部附属中学校 宇田 竜子、 滋賀大学教育学部 大嶋 秀樹

2. 事業の目的

本事業の目的は、滋賀大学教育学部附属中学校 2 年生対象に、検定教科書「New Crown 2」の題材を活かした CLIL を英語の授業において実施することにより、英語力だけでなく、本校教員で定義した「グローバル社会に生きてはたらく力」を身につけられるかを検証する。

3. 事業の概要

(1) 本事業における研究計画

本事業では、英語授業（英語 I）において CLIL を教科書 Lesson2、Lesson3、Lesson4 について行った。CLIL 前の 6 月の事前調査において「グローバル社会に生きてはたらく力（全 15 項目）」が身についているか、「身についている」「どちらかというと身についている」「どちらかというと身についていない」「身についていない」の 4 件法で質問した。その後、下表のとおり各レッスンを CLIL 指導を行い、事後調査にて、各单元で設定した「グローバル社会に生きてはたらく力」について身についたかどうか、を質問し、その結果を分析した。

6 月 1 週目	事前質問紙調査	8 月 4 週目	Lesson 3 事後調査
2 週目	Lesson 2（校内研究授業）	10 月 3 週目	Lesson 4
7 月 1 週目	Lesson 2 事後調査	11 月 3 週目	Lesson 4 事後調査
7 月 2 週目	Lesson 3	12 月～2 月	研究の総括（研究紀要）

（表 1）

(2) グローバル社会に生きてはたらく力

本校では、生徒に身につけさせたい力として 2020 年 4 月に「グローバル社会に生きてはたらく力」の 15 項目を全教員で定義した（表 1）。CLIL 授業を通して、この力を身につけたかどうかを検証した。

グローバル社会に生きてはたらく力

多様性を尊重する	柔軟な見方・考え方	協調・協働する力
幅広く教養を身につけようとする	多角的な見方・考え方	論理的に発信する力
国・郷土を愛する	国や郷土の文化や自然を探求する	魅力を発見する力
粘り強く取り組む態度	情報を収集・整理する力	課題発見・解決力
自分事として物事をとらえる	地球規模で物事を見る	新しい価値を創出する力

（表 2）

(3) CLIL を教科書題材と結びつける

CLIL は日本語で「内容言語統合学習」と訳される。CLIL で大切にされることは、4つの C と言われる。近年の CLIL では、それら 4 つの C をさらに 2 つに分ける傾向がある。Content (教科知識、活用知識)、Communication (言語知識、言語技能)、Culture (協働学習、国際意識)、Cognition (低次思考、高次思考) である。これらの要素を全て授業に入れ、相乗効果を図ることが CLIL の特徴である。換言すると、学習言語（英語）で学び学習言語（英語）を使いながら、同時に世界の様々な国の文化や歴史、社会的な問題について考え、深い思考を促すことが CLIL の特徴である。

本 CLIL においては、教科書の該当単元の題材内容、ねらいとする言語材料（文法、語彙）を、CLIL の 4 要素と絡めながら授業を設計した。そして、単元の最終ゴールのパフォーマンス課題へ至るまでの学習過程が、本校で定義した「グローバル社会に生きてはたらく力」の育成につながるよう設定した。

(4) CLIL でグローバル社会に生きてはたらく力をつける

「グローバル社会に生きてはたらく力」全 15 項目（表 2）から、教科書の題材とパフォーマンス課題の内容に合わせて、身につけさせたい力を設定した。例えば、Lesson 2 「Peter Rabbit」の場合、パフォーマンス課題は「自分が大好きな（絵本）作家の作品とつながりを英語で紹介しよう」であり、その課題に取り組むまでに、生徒たちは教科書題材を深めながらも視野を広げられるような開発教材を使用した。この全 11 時間の CLIL で生徒に身につけさせたいグローバル社会に生きてはたらく力は「・幅広く教養を身につけようとする・粘り強く取り組む態度・多角的な見方、考え方・情報を収集、整理する力・協調、協働する力・論理的に発信する力・魅力を発見する力」の 7 つであった。

検証の結果、CLIL で授業をした全 3 Lesson の事後調査のほぼ全ての質問項目の回答において、6 月の事前調査の回答と比較をすると、より多くの生徒たちが「グローバル社会に生きてはたらく力」が、「身についた」「どちらかというと身についた」と回答した。また、CLIL を行っていない単元(Lesson)との比較においても、CLIL を行った単元(Lesson)の方が「グローバル社会に生きてはたらく力」が「身についた」「どちらかというと身についた」と回答する生徒数が多かった。

本実践研究では、CLIL を取り入れた授業を実施することで、4C を有機的に統合し高次思考を促す英語の授業の実現が可能になり、グローバル社会に生きてはたらく力の獲得へつながるアプローチの事例を示すことができた。

4. 今後に向けて

CLIL を授業に取り入れることで、CLIL が「グローバル社会に生きてはたらく力」の伸長につながるであろうことが明らかになった。生徒の記述回答結果からも、開発教材や開発した思考ツールなどが深い学びを促すのに有効であったことが示された。暗記や記憶、暗唱などの低次思考活動に留まらず、高次思考活動を伴うような授業スタイルは、これから時代の英語教育に必要だと言えるであろう。

しかしながら課題は、教師の CLIL 教材研究と準備にかなりの時間がかかることがある。どの CLIL 単元においても、教科書の題材内容とターゲット文法を結び付けた教材を開発し、かつ、そこで学ぶ内容を出口の課題と絡めながらも、高次思考力を養えるようなスマールステップを考え計画し、教材を作成することに非常に時間を要した。来年度は、授業者の負担を少し軽減できるような CLIL 授業実践を考え、実践していきたいと考えている。

（文責 宇田 竜子）

1－10) 中学校の通級指導教室における指導・支援のあり方について —中学生に効果的なソーシャルスキルトレーニング（SST）の検討—

1. 事業名および担当者

事業名は、「中学校の通級指導教室における指導・支援のあり方について—中学生に効果的なソーシャルスキルトレーニング（SST）の検討」である。担当者は、教育学部：窪田知子、滋賀県X市立Y中学校校長およびZ教諭（通級指導教室担当教員）である。なお、通級指導教室に通っている子どもの個人情報保護の観点から、本誌では連携先学校名、担当者氏名を伏せて報告することをご了承願いたい。

2. 事業の目的

通級による指導とは、通常の学級に在籍し、ほとんどの授業を通常の学級で受けながら、障害の状態に応じた特別な指導を週1～8単位時間、特別な指導の場で行うものを指す。言語障害や弱視、難聴、肢体不自由、病弱・虚弱のほか、自閉症や学習障害（LD）、注意欠陥多動性障害（ADHD）の子どもが対象となる。全国的にみて、中学校の通級指導教室はまだ設置教室数が少なく（小学校22.2%，中学校8.5%「平成29年度通級による指導実施状況調査結果」），具体的な指導・支援のあり方については各自治体や各校の通級指導担当による試行錯誤が行われている。昨年度の研究より、中学生には「自己理解」「言語表出」「学習意欲」「生活習慣の形成」に課題を抱える生徒が多いことがわかった。そのような中で、本研究では中学校の通級指導教室における効果的な指導・支援のあり方について、とくに自己認知やコミュニケーションスキル、自己表現力といったソーシャルスキルを身につけていくことの有効性に着目して検討することを目的とする。

3. 事業の概要

（1）共同研究のスタイル

通級指導担当教員であるX市立Y中学校のZ教諭と、中学生で通級による指導を必要としている生徒のつまずきや困り感の見立て、必要な支援の方向性などについて検討を行った。

（2）研究の進め方

① 第1回検討会

令和2年8月28日（金）13:00～15:00、X市立Y中学校通級指導教室を訪問し、今年度の通級指導教室の状況について確認した。Y中学校の通級指導教室では小学生と中学生を対象としていることが特徴であり、指導を受ける対象の年齢や発達段階の幅が広いことが課題となっていることがわかった。その一方で、小学校から中学校への支援の移行は比較的スムーズに行えるというメリットがあることもわかった。ある生徒は、課題提出について「ワークブック p.3～12」ではなく、「ワークブック p.3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12」と具体的に指示する（書いて示す）ことで、「自分が何をしなければならないか」という課題の全体量を把握しやすくなっただけでなく、やり終えたページ数に「×」をつけていくことで、課題を最後までやりきることができたという。このように、それぞれの生徒に合わせた指示の出し方（伝え方）を通級で工夫することを通して、生徒自身が自分の

1 共同研究事業

認知特性に合った課題への取り組み方を見つけていけることも、ソーシャルスキルを高める支援の1つと言えるだろう。

② 第2回検討会

Y中学校3年生（昨年度の研究で観察を行った学年）の授業観察を行い、Z教諭とともに、通級による指導を利用している生徒の様子や課題、今後の支援の方向性について協議した。ある生徒は、通級指導教室で「とことん話を聴いてもらえる」経験を通して、少しずつ自分の言葉で自分自身のことを表現できるようになったり、とらえ方や解決方法に多様な見方ができるようになったりと、対人トラブルが減少した。また、通級指導教室で自分の得意な表現方法を見つけ、その表現が校内で認められる（ex. 校内に自分がつくった作品を展示するスペースを用意してもらえた）ことで、自分の存在価値を感じ、授業中に突然声をあげたりすることが減ったという。

③ 第3回検討会

令和3年3月に、X市立Y中学校通級指導教室において、第3回目の検討会を行う予定である。

（3）結果

Z教諭との協議や授業観察を通して、コグトレ（認知機能の未熟さに注目した認知トレーニング）などのソーシャルスキルトレーニングに取り組むだけではなく、「ここでは自分の困っていることに共感してもらえる」という安心感や「自分の話を最後まで丁寧に聴いてもらえる」という経験の積み重ねを通して、子ども自身の「自分の得意なことは○○だったんだ」「△△は苦手だけど、□□すれば自分でもできるんだ」といった自己理解を深めていくことに大きな意義があることがわかった。担任とは異なる“第三者”としての通級指導担当との関係や、自分の生活空間とは物理的に離れた教室で過ごす時間が、生徒にとって少し冷静に自分自身の生活や自己を省みるきっかけとなっているのかもしれない。「自己理解」や「言語表出」に課題のある生徒は、自分が困っていてもそれをうまく言葉で表現できずに、投げやりな言葉や態度でしか示せないことも少なくない。授業中に集中して活動に参加できずに教室をふらふらと立ち歩いていたある生徒は、Z教諭が話しかけると、「（活動に必要なものは）全部捨てた」「どうせ、3年間で1つも作れたことないし」と投げやりな口ぶりで答えていたが、Z教諭が生徒の言葉を丁寧に受けとめ、粘り強く言葉を返していくことで、ふと自分から教材を探しに行く姿を見せていました（第2回検討会の授業観察場面より）。このように、教室の中で「○○できない」姿を“やる気がない”“怠けている”ととらえるのではなく、“困っていてもそれをうまく表せない”姿として理解し、生徒自身が「自分が本当は○○したい（○○できる）」ということに気づいていくよう促していくことも、通級指導担当者の重要な役割であることも明らかになった。

4. 今後に向けて

Z教諭によれば、通級による指導に対する中学生のニーズは想定していたよりも高いという。なかには子ども自ら、「ぼくもここに通いたい」「こういう相談できる場が欲しい」と訴えに来ることもあると聞く。1日に指導できる人数に限りがある中で、通級による指導がそれを必要としている子どもにとて身近で手の届く支援となるために何が必要か、それと同時に、通級による指導の“終了”をどのように見極めていくかについては、今後さらに検討を進めていくことが課題である。

（窪田 知子）

1－11) 通級指導教室等の子どもに対する協調運動面の指導に関する実践的研究（4）

1. 事業名および担当者

事業名は通級指導教室等の子どもに対する協調運動面の指導に関する実践的研究（4）である。担当者は以下のとおりである。

教職大学院：川島 民子○ 奥田 援史 山本 一成

公立小学校通級指導教室：竹岡 久恵 西田 史子

2. 事業の目的

発達性協調運動障害とは、不器用で運動が苦手なことで生活や学業に支障が生じる場合を言う。近年、こうした特徴を有する児童は増加傾向にあり、小学校では通級指導教室等において活動することが多い。そこで、そうした子どもが、通級指導教室等でどのような学習活動をしているかを観察し、協調運動面を向上させる指導内容・方法について検討する。

3. 事業の概要

通級指導教室の担当教員は、通級指導教室に通う児童に発達性協調運動障害の特徴を有する児童が多いという実感がある。担当教員は、それらの児童に対して、より適切な学習活動に取り組みたいと考えているが、その具体的方法については模索状態にある。このようなニーズに対して、感覚統合の視点を取り入れながら指導を行うことの有用性について検討する。その際、本報告者がスーパーバイズとして関わりながら指導を進めることとした。

(1) 対象校 公立学校通級指導教室、特別支援学級 3校

(2) 実施内容

内 容	日 に ち	時 間	対象校	
	6月12日(金)	14:30～15:50	B 小学校通級指導教室	1回目
【授業研究】	6月24日(水)	8:30～12:30	A 小学校通級指導教室 特別支援学級	1回目
	7月10日(金)	14:30～15:50	B 小学校通級指導教室	2回目
	7月15日(水)	8:30～12:30	A 小学校通級指導教室 特別支援学級	2回目
	9月 9日(水)	8:30～12:30	A 小学校通級指導教室 特別支援学級	3回目
【授業研究】	10月 7日(水)	8:30～12:30	A 小学校通級指導教室 特別支援学級	4回目
	10月 16日(金)	14:30～15:50	B 小学校通級指導教室	3回目
	10月 28日(水)	8:30～10:30	C 小学校特別支援学級	1回目
	11月 4日(水)	8:30～12:30	C 小学校特別支援学級	2回目
	11月 11日(水)	17:00～18:00	C 小学校特別支援学級	3回目
	11月 18日(水)	8:50～12:30	A 小学校通級指導教室 特別支援学級	5回目
	11月 20日(金)	14:30～15:50	B 小学校通級指導教室	4回目
	12月 1日(火)	10:30～12:30	C 小学校通級指導教室	4回目
	12月 9日(水)	8:30～12:30	A 小学校通級指導教室	6回目
	12月 11日(金)	14:30～15:50	B 小学校通級指導教室	5回目

1 共同研究事業

	12月16日(水)	8:30~12:30	A小学校通級指導教室	7回目
【授業研究】	1月16日(火)	8:30~10:30	A小学校通級指導教室	8回目
	1月22日(金)	17:00~18:00	A小学校通級指導教室	9回目
	1月26日(火)	10:30~12:00	C小学校通級指導教室	6回目
	1月29日(金)	14:30~15:50	B小学校通級指導教室	6回目
	2月9日(火)	10:30~12:00	C小学校通級指導教室	7回目
	2月12日(金)	14:30~15:50	B小学校通級指導教室	7回目

*ケース児童の通級指導の参観（在籍学級での児童観察も含む）と通級指導についての指導助言

(3) 実際の内容（一事例）

①実態

○主訴（一部）

- ・学年相当の書き（ひらがな、カタカナ、漢字）の習得に時間がかかっている。
- ・構音障害がある。
- ・姿勢が崩れやすい。

○体の動きに関するエピソード（一部）

- ・少しでも隙間時間ができると、バランスボールのある場所に行き、座ったり、うつ伏せでもたれたり、床に仰向け姿勢になり両手足を使って転がしたりする。

②指導助言

○アセスメント（一部）

- ・S-JPAN (JPAN 感覚処理・行為機能検査 Short Version) 結果：姿勢運動や体性感覚、視知覚、行為機能を含む全般的に困難さが見られた。
- ・模倣動作では、教師の示範通りのポーズは取れ、左右の分離動作もできていた。ただ、自信がなさそうであり、正中線を超える動作が難しかった。座位姿勢等、全般的に低緊張ぎみであった。

○課題

- ・中心軸を作ることで、姿勢保持や正中線を超える活動が安定する。

③取組（一部）

・ひっぱってはこぼう

シーツの上に教師が乗り、そのシーツを本児が引っ張ってゴールまで辿り着く活動で、体幹を使い中心軸を作ることをねらった。また、乗る側にもなり、不安定な揺れの中で姿勢保持をし、中心軸を作ることもねらった。

・トランポリンでジャンプ

トランポリンでジャンプするだけではなく、教師が投げたぬいぐるみをキャッチする活動で、中心軸を作るとともに、自分も対象物も両方動く状況でタイミングを合わせられることをねらった。対象物をいろいろな方向から投げることで正中線超えの動きへも働きかけた。

④取組結果

通級指導教室でバランスボールに行くことはなくなり、通常の学級での観察より、授業中の姿勢保持もできていた。

4. 今後に向けて

これらの取組を継続することによって、通常の学級での学習との連携に取り組んで行く必要がある。

（川島 民子）

1-12) 確かな学力を身に付け、主体的に学ぶ生徒の育成

1. 事業名および担当者

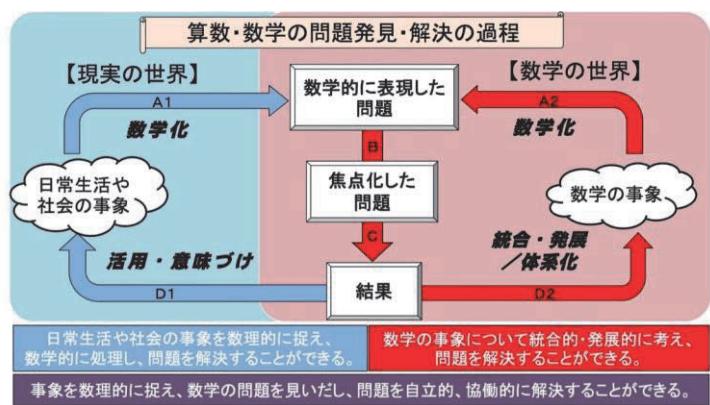
事業名は、「確かな学力を身に付け、主体的に学ぶ生徒の育成～わかった・できたを実感できる、魅力ある課題設定と学習集団の育成を通して～」であり、担当者は次の通りである。

豊郷町立豊日中学校：高畠裕之（校長），岩崎 剛（研究代表、数学科教諭），北村 俊（数学科教諭）
高井克徳（数学科教諭），木澤浩二（数学科教諭）

教職大学院：畠 稔彦

2. 事業の目的

本事業では、算数・数学の問題発見・解決の過程イメージ図の左側の【現実の世界】の部分を含む過程、日常生活や社会の事象を数理的に捉え、数学的に表現・処理し、問題を解決し、解決過程を振り返り得られた結果の意味を考察する過程プロセスを意識した教材の開発を進める。



中学校学習指導要領解説 p. 23 平成29年7月文部科学省

3. 事業の概要

数学科で、年間2回（6月、1月）の研究授業を行い、問題解決の必然性を感じる課題の設定や思考を深めたりするような発問や指導の在り方を検証する。あわせて、事前の指導案検討および先行授業についても大学担当者は指導助言にあたる。研究授業は、県内教員にも公開し、数学科教員の授業向上にも役立てる。研究協議は、コロナ禍の影響で参集が難しい教員に対しては、遠隔で参加できるようにする。

2020年6月17日（水） 指導案検討 23日（火） 研究授業 2年「資料の活用※」

※第1学年の内容であるが、全国一斉休校のため昨年末に指導できていない内容

2021年1月21日（木） 指導案検討 26日（火） 研究授業 1年「空間図形」

本稿では、実践された研究授業の2事例を示したい。

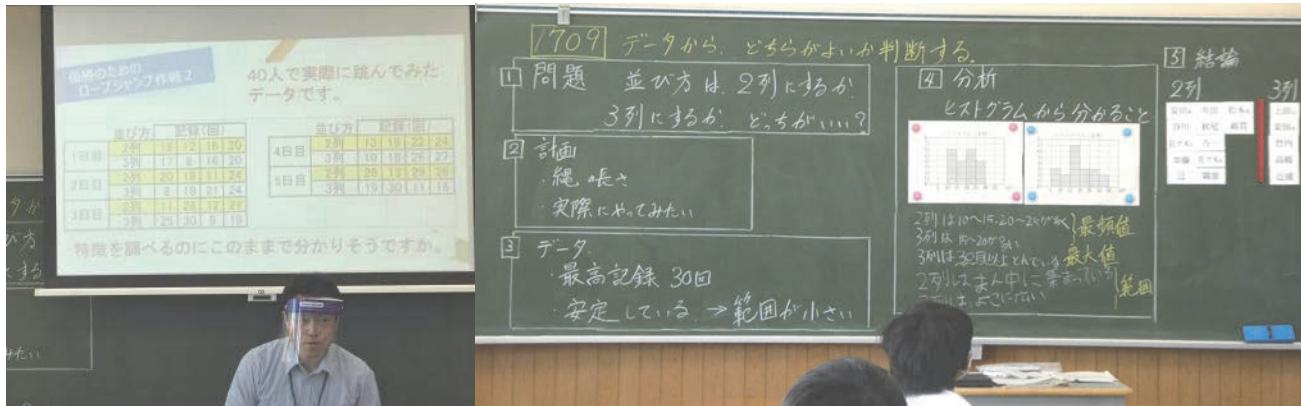
（1）2年「資料の活用」大縄跳びの並び方 習熟度別少人数授業

体育大会の大縄跳びで優勝するため、2列に並ぶか3列に並ぶかどちらがよいか、ヒストグラムや代表値など統計的な指標を根拠にして、それをもとに判断の理由を説明することをねらいとした。

本事例では、生徒が事象から問題を見出す手立てとして、「優勝するために、どんなことができるかを今日は調べたい。前にいた学校では大縄跳びを3列に並んで跳んでいたこともあった。どんな跳び方がよいか生徒みんなで考えて決めていたよ。」と話し、文脈を意識した導入がされていた。計画の段階では、全国学力調査の結果から分布をみて判断することに課題があるので、「何がわかれれば、2列か3列かどちらがよいと判断できるか」と問う中で、数値を並べたデータだけを示した。最大値や最小値

1 共同研究事業

を読み取ることや平均値を求めることができても、分布がわかるヒストグラムも必要になることを生徒に気付かせるための工夫である。また、「安定している」という生徒の素朴な発言に対しては、「どういうところを見て安定しているの」というように問い合わせし、根拠をもって説明することを求めていた。

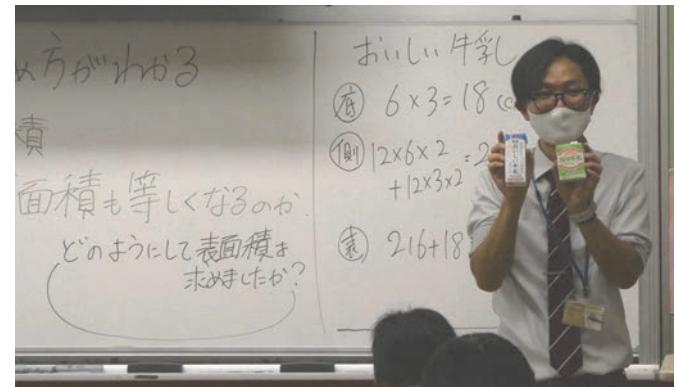


研究協議では、統計的手法で解決できるかどうかを吟味することも大切であることを確認した。

(2) 1年「平面図形」立体の表面積 習熟度別少人数授業

展開図をもとにして、柱体の表面積を求めることができることをねらいとした。内容量は等しいが、形が異なる四角柱の牛乳パックを見せ、表面積も等しくなるか予想をさせた。身近な問題となるように、給食で飲んでいる牛乳パックと市販の牛乳パックを取り上げた。

本事例では、容器には凹凸があるが、四角柱とみなして考えさせるというように、事象を数学の舞台にのせるところも丁寧に扱っている。柱体や錐体の表面積については、展開図の有用性も感得しつつ理解できるようにすることが大切である。そこで、生徒の考え方「6つの面、全ての面積をそれぞれ求める」、「合同な面を3種類求めて2倍する」、「展開図を用いて求める」を交流しながら、四角柱、三角柱、円柱と順に表面積を求める中で、素朴な考え方を洗練できるように展開した。



4. 今後に向けて

教科書教材をもとに、普段の授業の質に磨きをかけることを心がけたことで、日々の授業改善に生かすことのできる視点を提供することができた。コロナ禍の影響で、授業研究会の開催が危ぶまれることもあったが、研究協議会に遠隔でも参加できるようにしたことで、県内からの参加者を増やすことができた。1月の研究授業は、授業をzoomでライブ配信し、文部科学省から佐藤寿仁調査官にも視聴いただき、研究協議会では指導助言をいただいた。授業研究会へのニーズは高く、来年も継続したい。



(北村 俊・畑 稔彦)

1－13) 幼稚園と特別支援学校での音あそび・音楽づくりプロジェクト

1. 事業名および担当者

事業名：幼稚園と特別支援学校での音あそび・音楽づくりプロジェクト

担当者：林 瞳（教育学部），山本 一成（教育学部），岡 ひろみ（滋賀県立野洲養護学校）

連携先担当者：西村 佳子（附属幼稚園副園長），岡 ひろみ（滋賀県立野洲養護学校教諭）

研究協力者：可児 麗子（打楽器奏者），教育学部音楽専攻，幼児教育専攻学生8名

2. 事業の目的

特別支援学校での音楽づくり，幼稚園での音あそびプロジェクトを実施し，幼稚園や特別支援学校ではまだ事例が少ない音楽づくりの事例研究を目的とする。

3. 事業の概要

野洲養護学校の岡とは，本共同プロジェクトは3回目となり，特別支援学校における音楽づくりの共同研究を実施してきている。今回は特別支援学校に加えて，新たに附属幼稚園でも音さがし・音楽づくりのプロジェクトを実施した。両学校園での研究のはじめに，音楽づくりの授業経験が豊富な打楽器奏者である可児麗子がゲストとなり，身の回りにあるものや自然由来の楽器などのワークショップを皮切りに，音そのものに関心を向けることや，自分の音表現を楽しむこと，友だちの音表現を聞くこと等をねらった取り組みを約半年間にわたって実施した。以下に，特別支援学校での実践と幼稚園での実践に分けて述べていきたい。

・特別支援学校での実践

滋賀県立野洲養護学校高等部において，打楽器を使った音楽づくりの授業を行った。対象生徒の認識発達は3歳後半～7歳程度であり，話し言葉を使ったやり取りや，簡単な文章や記号でイメージを共有できる力を獲得している。また積極的に自分の思いを言葉で表現できる生徒だけでなく，自分の思いを発信することが苦手な生徒もいる。

本実践では，打楽器奏者の可児が音楽室の机を使って演奏する《机の音楽》（テリー・ドゥ・メイ作曲）を聴いた後，生徒達自身が自分の机を叩いたりこすったりして出る音を使って1人ずつ自分だけの音楽を作っていました。次に，竹筒楽器であるトガトンを使ってグループでの音楽づくりを行った。グループ毎に発表を行い，最後に打楽器奏者が演奏するマリンバと一緒に全員で即興曲を演奏した。生徒達はこれまでの音楽の授業で，簡単な既成曲の旋律を歌うことや演奏すること、決められたリズムを打楽器で演奏してきた経験はある。しかし本実践のように初めに演奏方法が提示されずに，自分で奏法を考えて音を鳴らすことや，自由に考えたリズムで演奏することは初めての経験であり，不安や自信のなさを感じている生徒もいた。こうした生徒達も専門家の演奏からヒントを得たり，自由に自分の演奏を楽しんでいる友だちの様子を見たりする中で，少しづつ自分の音を見つけて，自分なりの演奏を楽しみ始めていた。

（文責：岡 ひろみ）

・幼稚園での実践

滋賀大学教育学部附属幼稚園で、日常の生活の中での音に耳を傾け、興味を持ち、新たな発見や表現を育むことを目的として「音あそびプロジェクト」を行った。まずプロジェクトの皮切りに、子どもと音との意識的な出会いを設定したかったので、2020年10月に打楽器奏者の可児によるリズムのワークショップを5歳児2クラス対象に実施した。この際、楽器だけでなく料理に使うボウルのような日用品や竹といった自然物も使用した。その後、音に耳を傾ける機会が子どもの日常になるようにと考え、11月から毎週火曜日に、滋賀大学教育学部の音楽教育専攻と幼児教育専攻の教員と学生による「音屋さん」を自由遊びの時間に設定することにした。この音屋さんは音を売る店のようなイメージである。ピロティーや絵本室に、幼稚園テーブル2つに音符柄のテーブルクロスをかけ、そこに毎回のテーマに応じた視覚的にも美しく、楽しい、わくわく感を引き出すようなさまざまなモノを子どもの動きを考えて配置し、学生2、3人が一人ひとりの子どもの興味や遊びの様子を見ながら臨機応変に対応する。2020年11月～12月にかけて合計6回の音屋さんを実施した。学生らが考えたテーマを設定するのだが、第1回は「ボウルとビー玉」、第2回は「秋の音」、第3回は「新聞紙」、第4回は「色水とぶちぶち」、第5、6回は「オノマトペ」とした。音屋さんの看板を出してお店を開き、自由に音あそびを楽しんでもらうという企画である。研究の方法であるが、学生らが音屋さんをしている際に、学部教員2名（林：音楽教育、山本：幼児教育）がビデオや写真を撮影し、子どもたちの様子を記録する。加えて音屋さんの実践後に、学生、学部教員のほかに附属幼稚園副園長を交えて振り返りの話し合いを行う。さらに学生らが実践の際の子どもの反応や気づいたことなどをレポート形式で提出、ビデオや写真の記録とあわせて考察した。

本プロジェクトの進行の過程で、回を重ねるにつれて、音に耳を傾け、興味を持って表現する経験の機会が子どもたちの日常に浸透していった。第3回目あたりで「音屋さん」という存在が子どもたちのなかに定着し、前回の経験とのつながりが想起されたり、次の活動への期待や提案が子どもたちの側から示されたりした。初回の打楽器奏者の演奏に触れる機会から一貫して、「日常の生活の中での音に耳を傾け、興味を持ち、新たな発見や表現を育む」というねらいの下でのプログラムが用意されたことによって、ボウル、器、ザル、ビー玉、落ち葉、どんぐり、新聞紙、といった身近な素材から出る音を探索したり、素材を組み合わせたりすることを楽しむ経験が子どもたちのなかに重ねられていった。また、3回にわたる音屋さんのテーマや方法はすべて参加した学生のアイディアを生かしたものであり、これまで大学の専門教育の中で培われた「表現」領域ならではの専門的な視点から、音の「やさしさ」や「質感」、素材の面白さや鳴らし方といった知識や経験を生かして子どもの音との出会いを支援していた点で、教師教育の取り組みとしても有効な実践でもあったといえる。

（文責：林 瞳、山本 一成）

4. 今後に向けて

特別支援学校での実践では、自分の音を見つけて、自分なりの演奏を楽しみ始める姿が見られ、幼稚園の実践では、身近な素材から出る音を探索したり、素材を組み合わせたりする姿が見られた。今後は両学校園での成果を担当者間で共有し、議論していきたい。

（林 瞳、山本 一成、岡 ひろみ）



1－14) 石山っ子わくわく親子で畠体験隊

1. 事業名および担当者

事業名は、「石山っ子わくわく親子で畠体験隊」であり、担当者は次のとおりである。

教育学部：森 太郎（代表者）、與倉弘子、久保加織、石川俊之

地域ボランティア：内藤京子、石橋克也

大津市石山公民館専門委員：清水琴野

2. 事業の目的

農作物の栽培や観察など実体験を重視して農と食の大切さを理解し、食の安全・安心について考えるような「食農教育」が求められている。しかし学校現場において、このニーズに対応できるプログラムの確立、対応できる教員の確保は不十分である。そこで、地域の住民と連携して、小学生の親子を対象に畠体験活動を実施し、「食農教育」の地域連携プログラムを開発する。さらに、教育学部の学生がスタッフとして主体的に参加し、教育現場において「食農教育」に対応できる人材を育成する。

3. 事業の概要

1) 活動の概要

本プロジェクトは、石山公民館・地域ボランティアスタッフ・滋賀大学教育学部の3者の共同企画である。公民館は参加者の募集業務、地域ボランティアスタッフが畠体験の具体的指導、滋賀大学教育学部教員および教育学部の学生（主として環境教育専攻）が体験活動内容の計画立案、指導を行っている。本活動は、平成14年4月から始まり、3月に石山公民館を通じて石山および南郷学区の幼稚園、小学校の児童と保護者を対象に、「石山っ子わくわく親子で畠体験隊」への参加申込書を配布している。4月上旬から滋賀大学自然環境教育施設の農場にて、毎週水曜日の15時から17時まで食農体験活動を実施し、2月まで約38回の活動を行っている。

本年度は、8家族26名が参加した。新型コロナウイルスの感染拡大防止の為、4～9月は滋賀大学自然環境教育施設の農場での活動は行わず、自宅で夏野菜の栽培や農場の収穫物を使った食体験活動を行い、活動の様子について、コミュニケーションアプリLINEを用いて交流した。10月以降は、新型コロナウイルス感染拡大防止の対策をとりながら、滋賀大学自然環境教育施設の農場において対面で活動を行った。

2) 本年度の活動内容

本年度の月ごとの実施内容を以下に示す。

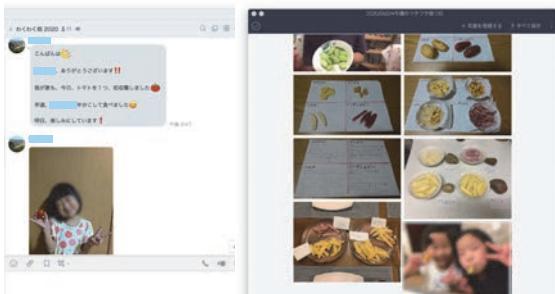
実施月	主な活動内容
4月	
5月	自宅で活動を実施 ・トマト、エダマメなどを栽培・食体験、数品種のジャガイモの食べ比べ（4～8月）
6月	・セルトレイに秋冬野菜を播種し、育苗（9月）
7月	
8月	活動の様子について、LINEを用いて交流
9月	
10月	セルトレイに播種した秋冬野菜の定植、秋冬野菜の播種、稲刈り・稲架がけ・脱穀、サツマイモ掘り、蚕の飼育
11月	チューリップなどの球根植え、焼き芋、干し柿作り、タマネギ定植、秋冬野菜の間引き・草取り・収穫、紙漉き

1 共同研究事業

12月	干し柿試食, しめ縄作り（地域のボランティアの方のご指導）, 秋冬野菜収穫, 米試食
1月	秋冬野菜収穫, スナップエンドウ定植,
2月	秋冬野菜収穫, 節分行事（豆まき）, ブルーベリーで染色
3月	秋冬野菜収穫, 蚕の糸繰り・真綿作り（公益財団法人 衣笠纖維研究所 古澤壽治 先生） 閉校式

本年度は、新型コロナウイルス感染拡大の防止の為、4～9月は滋賀大学自然環境教育施設の農場での活動を行うことができなかった。地域の子供たちへの実体験を伴う教育を可能な限り行うため、トマトの苗、エダマメの種子などを各家庭に渡して自宅での夏野菜の栽培を行ったり、農場で収穫した数品種のジャガイモを各家庭に渡して品種の食べ比べの食体験活動を行ったりした。その中で、参加者（地域の親子・ボランティアスタッフ・大学）間の交流を促すことを目的とし、コミュニケーションアプリLINEを用いて、栽培や食体験活動の様子を投稿するようにした（写真）。このような方法を取ることによって、コロナ禍で対面活動が困難になった直後においても、実体験を伴う活動や交流を最低限実施することができたと考える。

10月以降は、新型コロナウイルス感染拡大防止の対策をとりながら、滋賀大学自然環境教育施設の農場において対面で活動を行った（写真）。なお、焼き芋や干し柿、米の試食に関しては、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、自宅で実施した。実施した様々な活動の一部において、秋冬野菜の栽培において、子供たちから困りごとを挙げてもらい、解決していく活動を行った。子供たちからは、当番制の水やりに関して、タイミングや量について程度が分からぬることが課題として挙げられ、その課題を解決するためには土壤の水分状態を測ることができれば良いという意見が出たので、簡易的な土壤水分の測定器を活動に導入した。また、土壤の水分状態や作物の生育状況について、LINEへの投稿による参加者間の交流を行った。子供たちは、エビデンス（土壤の水分状態）に基づいて、行動する（水やりのタイミングや量を決める）ことで課題を解決していた。さらに、このような体験を基に、子供たちからは、家から土壤の水分状態が分かれば良い、作物の様子もカメラで分かると良いなど、その他の栽培に関する困りごとを解決していくためのアイディアが出てきており、課題を解決することの良さを学ぶことができていたと考える。



LINEを用いた参加者間の交流の様子



秋冬野菜の栽培の様子

4. 今後にむけて

現在、「食農教育」が求められているが、学校現場では十分に対応できていない。本事業は貴重な「食農教育」を行う場であり、今後も地域と連携して「食農教育」を行っていきたいと考えている。また、例年多くの学生が主体的に本活動に参加しており、将来教育現場で「食農教育」の体験活動を行える人材の育成としての場を担っているが、本年度は、新型コロナウイルスの影響もあり、学生の参加が3名に留まった。今後は、地域の子供への教育、学生への教育の両面から、With/afterコロナにおける新しい活動プログラムの開発と実践を行っていきたい。

（森 太郎）

1－15) 算数・数学教育実践研究セミナー

1. 事業名および担当者

事業名は、「算数・数学教育実践研究セミナー」であり、担当者は次の通りである。

豊郷町立豊郷小学校：中野泰弘（研究代表、校長）、松尾甚吾（教職大学院院生）

豊郷町立豊日中学校：北村 俊（数学科教諭）

教職大学院：畠 稔彦

2. 事業の目的

新型コロナウイルス感染拡大による臨時休校が全国各地で行われた。本年度は新教育課程による算数科の授業がスタートするはずであったが、学校現場の関心事は学校再開後にどのように授業の遅れを取り戻すのかという部分に向いている。そこで、学校再開後の算数・数学科の授業に取り組むにあたり留意すべきことを具体的に示しながら、新教育課程の趣旨を活かした授業づくりをすすめる。

3. 事業の概要

月1回の実践交流と1月に研究授業を行う。大学担当者は実践交流課における話題提供や研究会での指導助言にあたる。

(1) 算数・数学教育実践研究セミナー

豊郷町立豊郷小学校ふれあいルームを会場に、下記の日程で7回実施した。話題提供の内容は以下のとおりである。

第1回 8月29日（土）15:00-17:00 参加者12名

- ・学習指導要領にみる算数・数学科の目標の変遷
- ・教科書の意図を汲んだ教材研究 - 起こり得る場合の単元を例に -
- ・数学的見方・考え方を働かせ、数学的活動を通して、数学的に考えることについて

第2回 9月19日（土）15:00-17:00 参加者14名

- ・中学校における指導の実態について
- ・小学校における複数指導の在り方
—秋田市立明徳小学校の事例—

第3回 10月24日（土）15:00-17:00 参加者14名

- ・困難教材の指導について —単位量あたりの大きさ-

第4回 11月28日（土）15:00-17:00 参加者12名

- ・自力解決の時間が充実するために 東近江市立箕作小学校の事例
- ・問題解決のための工夫
- ・成り立つ事柄の予想と証明を振り返る - 全国学力調査問題から - 附属中学校の事例

第5回 12月19日（土）15:00-17:00 参加者11名

- ・問題提示の工夫、学習のねらいの提示の工夫
- ・生徒と問題をつくる - 比例とみなすこととおして - 近江八幡市立八幡西中学校の事例



1 共同研究事業

第6回 2月27日（土）15:00-17:00 参加者11名

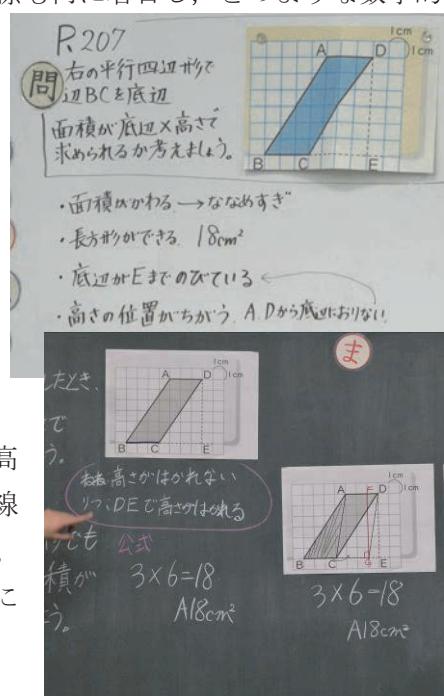
- ・自己調整学習について

第7回 3月20日（土）15:00-17:00 参加者12名

セミナーの学びについて、授業実践を積んでいる力量のある中学校教員が次のように述べている。「前回先生に問われた『この会での学び』についてですが、家に帰ってもう一度考えてみました。問われた時は、『教材研究が・・・』などと言っていましたが、そこが1番ではなかったなと思いました。今回は、小学校の先生と一緒に教科書を読ませていただいて授業を考えました。自分なりに考えを述べたのですが、先生にご指摘いただいたように子どもたちが考えるための足場は何か、教科書の意図・流れは何かなど考えが至らなかった部分がたくさんありました。自分の勉強不足を痛感しました。中学校の先生とは、校内や研究協議会など話し合う機会はありますが、小学校の先生とこのような近い距離で、思ったことを自由に話し合えるのは、この会以外にはないと考えます。たいへん貴重な機会をいただいていると思っています。小学校算数は中学校数学に大きく影響していると考えています。この会で、先生にアドバイスをいただきながら小学校の先生との話し合いを通じて自分の授業を見つめ直していくたいと考えています。」小中合同で実施しているセミナーの長所が若手教員だけでなく、経験豊富な教員にとっても学びの場であったことがわかる。

（2）研究授業 第5学年「四角形と三角形の面積」習熟度別少人数授業（2クラスを3コース）

本時の目標は、「平行四辺形の高さが底辺の延長線上にあることに着目し、既習の図形に変形して面積を求める数学的活動を通して、どんな平行四辺形でも「底辺×高さ」で面積が求められることを理解することができる。」である。新学習指導要領が全面実施となり、教科の目標の文頭に数学的な見方・考え方を働きかせてと明記されたことを意識して、指導案の本時の目標も何に着目し、どのような数学的活動を通すのかを明記するようにした。授業参観者にも指導者の意図が端的に伝わり、このような表現を推奨していきたい。右の写真は、授業の導入で、児童の気付きを板書に記しながら、本時のめあてをつくる場面である。辺BCを底辺としたときの「どこを高さにすればいいのだろう」という児童の問い合わせを明らかにするために、まず、高さが図形の中にあるような平行四辺形に等積変形や倍積変形することでその面積を求めた。そして右下の写真で示すように、平行四辺形の高さについて考えるために、「○○さんの考え方で、形を変える前と後で底辺の長さは等しいから、高さは同じはずです。FGと長さが等しいところはどこですか？」と発問し、平行四辺形の高さは、底辺をのばした直線と、底辺と向かい合った辺を延ばした直線のはばと考えることができることをおさえた。一連の活動を通して、児童は、高さが図形の中にあるときも、中にはないときも、同じように高さを考えることができることを理解することができた。



4. 今後に向けて

セミナーでは、経験年数や校種が違っても、互いの考えを交流し、それぞれが算数・数学の授業について考える機会となり、自らの実践を振り返る機会となった。来年でも継続していきたい。（畠 稔彦）

1-16) 義務教育現場を対象とした【声を鍛えるルーティントレーニング】の作成・実施

1. 事業名および担当者

義務教育現場を対象とした【声を鍛えるルーティントレーニング】の作成・実施

担当：滋賀大学教育学部 音楽教育講座准教授 渡邊史／滋賀大学教育学部附属小学校教諭 矢吹雄介

2. 事業の目的

以下を目的とし、実践的トレーニングの手段を開発、提供する。

- 発達期にある児童生徒を対象として「表現ツール」としての「声」の構築、汎用の動機づけを行う。
- 児童生徒が「自身の声」と向き合うことで「自分自身」と客観的に対峙、すなわち「客観的視点」を獲得していくためのきっかけとなることを期待し、実践トレーニング提案する。
- 「声表現」に関する能力をより向上させるため、具体的な知識、スキルを得る。その第一歩として「〈音声として〉適正な声」の構築に取り組む。
- 意識的な取り組みをとおして自身の心身に興味を持ち、心身の健やかさを自発的に律し、保つための様々な「気づき」「自己確認」のきっかけとする。

「声」は人間の表現ツールとして汎用性が高く、その「発し方」が他者にもたらす影響は大きい。しかし現代日本においては「〈声〉の発信」が軽視されている状態と言わざるを得ない。

令和2年度4月から順次施行され始めた新学習指導要領『生きる力』において、「日本の次代を担う子どもたち」に求められる様々な資質・能力を培うため、最重視されているのが「言語活動」だ。現行・新学習指導要領の指針となった平成20年中央教育審議会答申《幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について》によれば、言語は「知的活動（論理や思考）やコミュニケーション、感性・情緒の基盤といった役割を担っている」とある。「近年の国内外の学力調査の結果などから、我が国の子どもたちには思考力・判断力・表現力等に課題がみられる」。この記述は現行の新学習指導要領にて頻回に繰り返され、国としての問題意識の高さが窺える。しかし、言語それ自体の「音声的発信」については、ほぼ言及されていない。そして「音声表現」に関することは、新学習指導要領内の国語、音楽、その他教科についての、どの記述箇所を見ても明らかではない。これは「教育の指針」として充分と言えるだろうか。現代日本において人々は、「声」の扱い方に無頓着過ぎるのではないか、と筆者は常々感じている。ことに、本年のCOVID-19の蔓延によって否応なく進めざるを得なかつた、様々な「対面機会のオンライン化」は、私たちに新たな「声に関する気づき」を与えてしなかつただろうか。「伝えるべきこと」、「伝える責務」を持っている人たちですら、テレビ、ラジオ等を通じて発信している「声」の扱いが粗雑であり、その結果として、音声による情報伝達およびその効果が著しく阻害されていると言わざるを得ない。

この研究に着手したのは、これまで筆者自身が大学講義や社会活動としての講座などを展開するうちに、「声表現の可能性拡大のためには成長期における学びが不可欠である」との確信を得たからである。学齢期、ことに小学4年生程度から、児童生徒の多くは身体能力の発達も著しく、「自発的な努力」「目標を持っての成長」ができるようになり、自身でその成長を自覚し喜べる情緒面の発育も顕著である。この時期に「指針」として一定の「メソッド」と出会い、行うことは、彼らの心身に大きな効果をもたらす

1 共同研究事業

らす。また、成長の指針として周囲環境、すなわち保護者、学校教員をはじめとする「大人たち」を観察しての「模倣」も大きな要因となることは間違いない。

児童生徒たちは成長発達の後、「大人」になる。我が国次代を担う彼らが、真に豊かな表現力を備え、自身の生きる社会と適切なコミュニケーションをとりつつ、「個人としての互い」が「良い関係」である…そんな社会であるための布石となることが、当研究が未来に描く「目的」である。

3. 事業の概要

小学生（今回は、合唱部に所属する小学校4年生～6年生）を対象とした【声を鍛えるルーティントレーニング～史センセイの声トレ道場】の作成・動画配信を行った。

動画内容は「声」を用いた表現活動である「歌唱」を主軸とし、「全身ストレッチ」「パート別ストレッチ」「滑舌」、「ピッチ」、「母音・子音の構築」、「音読基礎」など、目的別のトレーニングを提案。視聴者が実際に動画と共に取り組む、オンデマンド・レッスン形式。複数人数でも、個人でも、学校内で、各家庭で、いつでも自身のスケジュールで取り組める形であり、復習や苦手ポイントの再確認も自由に行うことができる。動画はデータとして矢吹教諭に管理してもらい、それ以外に You tube をとおして配信した。学校内で行うトレーニング時には動画データを用い、各家庭での個人練習では You tube、と使い分ける。動画一本を、初期段階から児童生徒が自発的に一人で視聴し、理解・習得するのは難しい側面もあるだろうことから、指導者（今回は矢吹教諭）が履修課題のキーワードを抽出したレジュメのようなものを用意、配布することが望ましい。これがあることで、トレーニングの取り組み方や効果が上がったことは間違いない。

動画作成の方法詳細については、『滋賀大学教育実践研究論集 2020』に紀要論文として寄稿したので参照されたい。

4. 今後に向けて

筆者は、研究として「声」を表現ツールとして充実させるためのトレーニングメソッド構築・提案を目指している。今回の『声道場』シリーズは、その一里塚的なものだ。だが、今回作製した動画には、不充分な点が多数ある。具体的な反省点も既に把握しており、改善すべき事々およびその方法も明らかである。そして何よりも、この「声道場」シリーズは、筆者が真に目論んでいる「充分な形」ではない。現在、筆者が想定して（夢見て）いるのは、完全な「トレーニング【動画】」なのだ。分かりやすい例は、2018年からNHKで放送されている『みんなで筋肉体操』だ。同チャンネルで長く放送されているシリーズ、『テレビ体操』に則った体裁にて、かなりハードな筋力トレーニングを実演指導する、5分間の番組である。このような体をもって、これまでの研究において筆者が構築してきた「音声発信技術向上メソッド、エクササイズ」を「トレーニング動画」として、プロの俳優、歌手らと共に適正な形で撮影、作成したい。当該メソッドの特徴を以下にまとめる。* 対象年齢は9歳（小学校4年）程度から高齢者まで幅広く。* 通常の身体能力にて、一人で、もちろん複数人でも取り組める。* 理解しやすく動作が容易であり、反復しやすい。* 履修したいセクションごとに細分しており、対象者個々の意思で選択し取り組める。* 特別な器具(楽器等)を用いず、家庭にあるものを活用。

現場の最前線で児童生徒と向き合う矢吹教諭を始めとした附属小学校の先生方と共に、さらに研究を重ね、より実用的かつ汎用性の高いメソッド構築を試みていきたい。

(渡邊 史)

1－17) 知財創造教育の先進的な取り組みの開発

1. 事業名および担当者

事業名は「知財創造教育の先進的な取り組みの開発」であり、担当者は次のとおりである。

教育学部：糸乘 前、足立真心都（4回生）、奥村諭（4回生）

大津市立仰木中学校教頭：澤田一彦、同教諭：池内伸圭（H30認定CST（コア・サイエンス・ティーチャー））

滋賀大学教育学部附属小学校教諭：柳哲平、山際真知子（R1認定CST）

滋賀大学教育学部附属中学校教諭：原田雅史

2. 事業の目的

本事業の目的は、知財創造教育の先進的な事例として、実践授業を行うための教材開発とその実践を目標としたものである。この知財創造教育が求められる背景には、これから社会や産業の構造が変化する、所謂Society 5.0の時代において、大きな変化に伴い児童生徒に求められる力も変化すると考えられることにある。しかしながら、こういった力は既に児童生徒が潜在的に保持していると思われ、教師がその力を引き出そうということである。そのために知財創造教育は、「新しい創造をする」、「創造されたものを尊重する」ことにポイントを置き、「創造されたものによって社会が豊かになっていることに気づくことにより、創造されたものを尊重することの意義について理解を深め、楽しみながら自ら創造していこうとする態度を育成する」ことを目標としている。即ち、子供たちが「いいな」を思い描くことを経験することで、大人になって「いいな」と思ったことを実現できるための教育を目指している。一方で知財創造教育は、平成28年に内閣府の知的財産戦略本部によって提唱・推進され、その体系化と教育プログラムの収集・作成が行われてきているが、その普及はあまり進んでいないとは言えない。また、先進的な取り組みは高等専門学校・高校あるいは中学校などで行われているが、個々の取り組みに終わっているものが多い。また、小学校における知財創造教育は、全ての教科で実践が試みられてきているが、意外にも理科での実践が少ない。そこで、小学校での知財創造教育の推進については、理科を中心に設定し、教材開発および実践を行うことを目的として設定した。

参考：内閣府 知的財産計画推進事務局「知財創造教育」（パンフレット）2018年3月

3. 事業の概要

学習指導要領を参考とし、小学校は第三学年から第六学年、中学校は第一学年から第三学年の各学年においてエネルギー・物質・生命・地球の各々四分野から知財創造教育を組み込むための単元選択を行った。各学年の問題解決の力を基本とし、選択した単元において、分野、単元名、学習内容、社会での応用、尊重のポイント、知財創造教育的発問、めあて・評価のポイントをまとめた。学習内容と社会での応用は、教科書のトピックや発展から学習内容を日常生活に取り入れている項目を抽出した。知財創造教育的発問とは、知財創造教育の要素である児童生徒の身の回りと結びつけること、児童生徒の感動・尊敬・尊重・意欲を向上させることを目指し、尊重のポイントを意識した発問を考えた。さらに尊重のポイントや発問を考えることで、大きなめあてを設定し、それらを評価できることとしてまとめた。附属小中学校の教諭と大津市立中学校の教諭にアイデアとして提案し、数多くの指摘やアドバイスを受けることができた。特に中学校では、全学年あるいは小学校から連続する学習の流れ、即ち、どの学年の学習内容と関連させて知財創造教育を設定するかの単元構想の必要性を指摘された。また指導案につ

1 共同研究事業

いては、実施に向けた改善点として、単に何かを作るだけの授業では無く、既習内容を利用した根拠がある工夫や創造である必要性についても議論した。今後の指導案計画に活用したい。

指導案は小中学校で各1単元ずつしか作成できなかったが、小学校では下記の実践に活用することができた。中学校では新たに導入することで授業時間数ができるだけ増加しないような工夫を考えた。現在実施されている授業内容にできるだけ即した内容を取り上げることで、段階的に知財創造教育的な発想を経験できるような流れとした。知財創造教育を行う難しさとしては、新たな内容に対する準備が多くなり負担が増えるため、指導方法の確立と事例を増やす必要がある。また、導入する教員による重要性の理解が必要であろう。さらに新しい創造をする力を育むことの難しさがあり、創造されたものを尊重する態度、即ち、発明・発見などの素晴らしさに気づかせる授業の積み重ねが必要と考えられた。

授業実践 日時：令和3年2月9日（火）1・2校時 場所：滋賀大学教育学部附属小学校

研究授業：小学校3年理科「こん虫すごおい！～知財創造教育～」

授業者：滋賀大学教育学部附属小学校 山際 真知子 教諭

共同研究者：柳 哲平 教諭（研究主任） 指導案提案者・参観者：4回生 足立 真心都

単元目標：昆虫の生息環境、成長過程、体のつくりを比較しながら理解し、観察などの技能習得と共に生物を愛護する態度と主体的に問題解決しようとする態度を育成する。（従来と同様）

本時の目標：身の回りの昆虫について学んだことを生活に活かそうとする。

めあて：こん虫のとくちょうを使って役に立つものを発明してみよう（知財創造教育）

導入：写真や動画を用いて昆虫の特徴を活用したものを紹介（蚊の口を模した注射針など）。

最先端科学技術にも用いられるバイオミメティクス（生物模倣）の紹介。

展開：紹介した5種類の身の回りの昆虫の良いところを用いて「役に立つもの」を考える（協働活動）。

思いついたことを各昆虫シートに付箋で文章として書き込む（文章による表現力）。

発明家として役に立つものを絵と文章で表現する（何の役に立つ、どんなとき、何のため）。

発表：4名グループで1名が説明を担当、4回入れ替えるカフェテリア方式により、全員一回の発表機会を確保した（アイデアの共有）。



4. 今後に向けて

研究代表者は、内閣府知的財産戦略推進事務局の知財創造教育推進コンソーシアム検討委員会と普及実践ワーキンググループの委員として活動している。今後はネットワークを活用し、附属小中学校の教員並びに県内のCST教員と協力しながら実施することの有用性をさらに検討していく。特に授業実践については、指導方法の確立と事例を増やすために内閣府の関連ホームページでの公開を行っていく。

[知財創造教育推進コンソーシアム「知財創造教育」に関する教育プログラム \(kantei.go.jp\)](http://www.kantei.go.jp/jp/singi/titeki2/tizaikyouiku/program.html)

www.kantei.go.jp/jp/singi/titeki2/tizaikyouiku/program.html

尚、本研究は教育学部学部プロジェクト研究からも支援を得たことに感謝いたします。（糸乗 前）

2 出前講座

この出前講座は、滋賀県内の学校等における研修や講演会に教育学部教員を講師として派遣する制度である。既に、教育学部教員は県や市町教育委員会や各学校の依頼を受け、研修講師の役割を遂行している。しかし、これらのネットワークが成立していない場合や新任教員の派遣の場合に限っては、本出前講座は有効なものであろう。

令和2年度の出前講座については、こども園1園、小学校2校、中学校2校、図書館、児童館の計7件の実績であった。他に県内外からいくつかの依頼があったが、コロナの影響や日程等の関係で成立しなかったケースがある。下記が今年度実施した出前講座である。

出前講座一覧

講師	依頼機関	実施日	題名
大平 雅子 准教授	滋賀県立守山中学校	10月3日	ストレスと上手に付き合う方法
神 直人 教授	守山市立図書館	11月15日	数学の考え方（一般向け講義後、職員向けに40分程度アドバイス）
渡部 雅之 教授	金勝児童館	11月19日	子どもの「こころ」に気づく時
大平 雅子 准教授	光泉カトリック中学校	11月26日	①ストレスと上手に付き合う方法 ②良質な睡眠とは
山田 淳子 先生	草津市立志津こども園	12月25日	子どもが楽しんで取り組める運動遊びのヒントと運動を進める上で
大山 政光 准教授	堅田小学校	1月28日	太陽の科学
篠原 雅史 准教授	堅田小学校	3月2日	正多面体のその数理

多くの教育関係者の方々に本出前講座を利用していただくため、出前講座一覧を本学部ホームページにアップロードしている。下記がその出前講座一覧である。

数学教育関係分野

分野	題名	講師	講座	対象	内容
数学教育	正多面体とその数理	篠原 雅史 (しのはら まさし)	数学教育講座 (離散幾何学)	児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小高・特) 保護者 市民一般	正多面体はブランの多面体として古くから知られていて、正四面体、正六面体(立方体)、正八面体、正十二面体、正二十面体の5種類があります。実際に正多面体を作ったり、展開したり、計算したりすることを通して、正多面体の対称性やその美しさを体感してもらうことを目標とします。
数学教育	無限の考え方	神 直人 (じん なおんど)	数学教育講座 (解析学)	児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) 保護者 市民一般	私たちは小学校の頃から無限の考え方を利用しています。無限の考え方を利用すると多くのことが明らかになる一方で、無限のバラエティというのも存在します。この無限の持つ二面を紹介することで算数・数学の面白さ、考えることの楽しさに気づいてもらえればいいと思います。
数学教育	非線形現象の解析	鈴木 宏昌 (すずき ひろまさ)	数学教育講座 (解析学)	生徒(高) 教員(中・高)	私たちの身の回りで見られる様々な非線形現象は、しばしば数理モデル方程式で表されます。本講義では、数理生物学における生物個体群のモデルや、化学反応のモデル方程式の解析を通じて、数学と自然科学との関わりの一面を紹介します。モデル方程式にもとづいた計算機シミュレーションも紹介する予定です。
数学教育	算数・数学教育の理論と実際	高澤 茂樹 (たかざわ しげき)	数学教育講座 (数学教育学)	教員(小・中)	算数・数学科の教授・学習過程について、理論的研究を教育実践にどのようにいかすかを検討する。特に、教師として子どもたちの数学的認識をどのように捉え、それを基にしてどのように指導すべきかについて考えたい。

2 出前講座

分野	題名	講師	講座	対象	内容
数学教育	江戸時代の数遊びから見る現代数学	長谷川 武博 (はせがわ たけひろ)	数学教育講座 (代数学)	教員(中・高)児童生徒(高)	江戸時代の和算家 吉田光由(みつよし)によって書かれた和算書「塵劫記(じんこうき)」に収録されている文字遊び・数遊び「目付字(めつけじ)」・「繼子立(ままこだて)」などがあります。これらの遊びを紹介し、その背後に隠れている数学を考えます。具体的にはn進法や数列などが隠れています。
数学教育	数学的ジレンマを使った対話による算数・数学科授業	渡辺 康子 (わたなべ けいこ)	数学教育講座 (数学教育学)	教員(小・中・高)	「算数・数学科の授業で先生と児童・生徒たちが如何にして対話をし、新たな知識を作り上げていくのか」について、具体的な教材(学習・指導の内容、具体的な問題)をもとに議論します。対話型授業の構造と展開を探求した上で、「話し合い」を取り入れた授業における教師の役割についても議論したいと思います。

社会教育関係分野

分野	題名	講師	講座	対象	内容
社会科教育	地理から考える物語の舞台	安藤 哲郎 (あんどう てつろう)	社会科教育講座 (地理学)	児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・中・特) 市民一般	説話などの古典を読むと、いくつか地名が出てきます。こういった地名と物語の内容を手がかりとして地図を作りながら考えると、物語が作られた時代の人々が物語の舞台となった場所についてどのような認識を持っていたのか分かることがあります。地図やパネルを使しながら、地理から物語の舞台について一緒に考えてみましょう。
社会科教育	史料を基礎と日本史(前近代史)	宇佐見 隆之 (うさみ たかゆき)	社会科教育講座 (日本史学／日本中世史)	児童・生徒(小6以上) 教員(小・中・高)	歴史の記述は、すべて史料に基づいて行われています。このため、記述の背景にある史料の理解なしに理解できません。史料と教科書の記述を照らし合わせながら日本前近代史への理解を深めましょう。
社会科教育	古代ローマ史にみる曖昧な「史実」	大清水 裕 (おおしみず ゆたか)	社会科教育講座 (西洋史／古代ローマ史)	児童生徒(中・高) 教員(中・高) 市民一般	歴史学は、様々な史資料を用いて過去の社会を再構成しようとする学問です。しかし、そこで用いる史資料が互いに矛盾していたり、あるいは荒唐無稽だったりすることは少なくありません。本講義では、古代ローマ史の中から有名な事件を取り上げ、人口に膾炙している「史実」の曖昧さと、「史実」を確定しようとする歴史学の営みをご紹介します。
社会科教育	論理学初步	齋藤 浩文 (さいとう ひろふみ)	社会科教育講座 (哲学)	児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) 保護者・市民一般	論理学への入門として、以下の2つのいずれか、または、両方について講義します。 (1) 形式論理学の初歩について紹介しながら、論理とは何か、そして、論理的であるとはどういうことかを考えます。 (2) 非形式論理学を背景として成立したクリティカル・リーズニングについて、その基本の紹介と実践を目指した演習を行います。
社会科教育	滋賀の近代史	馬場 義弘 (ばんば よしひろ)	社会科教育講座 (政治学／歴史学)	市民一般	明治前期に滋賀県の県令(のちの県知事)を務めた松田道之(初代、明治4年11月～明治8年3月)、籠手田安定(二代、明治8年5月～明治17年7月)を中心に、近代国家の形成と滋賀県政について考えます。
社会科教育	景観写真の観賞と教材化	松田 隆典 (まつだ たかのり)	社会科教育講座 (人文地理学)	児童・生徒(小・中・高) 教員(小・中・高) 保護者・市民一般	WEB上に多く掲載されている景観写真の観賞の仕方について、実例をもとにわかりやすく説明するとともに、社会科や地歴科・公民科のための教材化の可能性について示します。具体的なテーマとしては、視覚的にわかりにくい気候を植生写真で説明したり、国際理解のために必要な社会的コンテキストを都市景観写真などで紹介します。
社会科教育	社会調査に触れる	宮本 結佳 (みやもと ゆか)	社会科教育講座 (社会学)	市民一般	近年、パソコンを利用する機会が増え、表計算ソフトが身近になったこともあって様々な場面でアンケート(質問紙調査)を実施する機会が増えています。本講義ではアンケートをつくるとき、一体どのようなことを気をつけなければいいのかについて紹介します。
社会科教育	身近な事件や話題をもとに法・裁判の役割を考える	渡辺 晃彦 (わたなべ あきひこ)	社会科教育講座 (法律学／日本国憲法)	生徒(小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) 保護者・市民一般	私たちも「裁判員」として裁判に関わる時代となりました。法や憲法、そして裁判に対する关心も高まっています。本講義では、最近の身近な事件や話題を取り上げ、実際の判決文などを活用しながら、日本国憲法や裁判についての理解を深めていきたいと考えています。

2 出前講座

国語教育分野

分野	題名	講師	講座	対象	内容
国語教育	近江国と和歌	井ノ口 史 (いのぐち ふみ)	国語教育講座 (日本古代文学)	児童・生徒(中・高) 教員(中・高) 保護者・市民一般	古代から近世まで、それぞれの時代背景を踏まえつつ近江国に関連する和歌を紹介します。近江国(現在の滋賀県内)には、和歌に詠まれた地名が少なくありません。いかなる風景が描写されているのか、和歌を通じて近江国の魅力を再発見することをめざします。
国語教育	書とその周辺	中村 史朗 (なかむら しろう)	国語教育講座(書道)	児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) 保護者・市民一般	人はどのようにして「書の美」を自覚するようになったのでしょうか。王羲之や空海の筆跡はどこがそんなに上手いのでしょうか。生活の場において「手書き」の機会が減って、書という表現の領域は失われてしまうのでしょうか。書と周辺のさまざまな問題を取り上げます。講義と実習をあわせて実施することも可能です。
国語教育	国語教育における学びの探究	長岡 由記 (ながおか ゆき)	国語教育講座 (国語教育学)	児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特)	近年、さまざまな言語活動を取り入れた国語学習が行われています。国語の学習における学びの手応えは必ずしも得やすいものではなく、言語活動を取り入れた学習の成果と課題も明らかになりつつあります。そこで、演習を交えた講義を行い、国語教育における学びについて具体的な学習材や学習指導法を取り上げながら探究していきたいと思います。
国語教育	唐詩を読もう	二宮 美那子 (にのみや みなこ)	国語教育講座 (中国古典文学)	生徒(中・高) 教員(小・中・高) 市民一般	中国古典詩を代表するのが唐詩(唐代に作られた詩)です。唐詩には、古くから日本人に愛されてきた多くの素晴らしい作品があります。この講義では、作品の背景を丁寧に解説しながら、漢字一文字一文字にこめられた意味を大切にして唐詩を読み解き、その豊かな世界をご紹介します。
国語教育	方言を考える	松丸 真大 (まつまる みちお)	国語教育講座 (日本語学／方言学)	生徒(小・中・高) 教員(幼・小・中・高・特) 保護者・市民一般	ひとくちに日本語といっても、その内実は人によって、または場面によって異なります。の中でも地域による言葉の違い(=方言)は多くの人が興味を持つテーマです。この講義では日本語の方言をとりあげ、なぜ・どのように方言があるのかを考えていきます。この授業を通して、言葉について考えることの楽しさに気づいていただければ幸いです。

音楽教育関係分野

分野	題名	講師	講座	対象	内容
音楽教育	ピアノ演奏法	犬伏 純子 (いぬぶし すみこ)	音楽教育講座 (器楽／ピアノ)	生徒(中・高) 教員(中・高) 市民一般	合唱や独唱の伴奏について、歌とのアンサンブルとしての役割を認識しながら、どのように音楽を組み立て、表現の可能性を広げるかを受講者の演奏をとおして考えたいと思います。
音楽教育	オーボエ演奏法／木管アンサンブル	中根 康介 (なかね ようすけ)	音楽教育講座 (オーボエ／ 木管合奏)	生徒(中・高) 教員(中・高) 市民一般	オーボエの経験者を対象に、基本的奏法を学び、練習曲集などを用いて音楽的な表現を学びます。木管を中心としたアンサンブル(木管四重奏、五重奏、ピアノと管楽の五重奏、六重奏、など)を通して、より高度な音楽作りを学びます。
音楽教育	楽しい音楽づくり	林 瞳 (はやし むつみ)	音楽教育講座 (音楽教育)	教員(幼・小・中・高・特)	音楽づくり、創作のワークショップをします。教師向けのワークショップや講習会、児童・生徒向けの授業のデモンストレーションもします。音楽がなくても、ピアノが弾けなくても、おもしろい音楽を作る方法があります。楽しく音楽をつくり、子どもたちが自らの表現に目覚める瞬間に一緒に体験できたらと思います。
音楽教育	音による表現をめぐって	若林 千春 (わかばやし ちはる)	音楽教育講座 (作曲／音楽理論)	教員(中・高・特) 保護者・市民一般	お芝居の台詞に、その場に適した演技があるように、音楽にもそれぞれ適切な表現の方向付けがあります。「ここで音楽はどんな台詞を演じているの?」という問題を、一緒に考えてみましょう。楽譜に書かれていない「とても大切なこと」を見つけたり、簡単な音楽文法のおさらいや、創作の実践などを通じて、音による表現と共に深めてゆく場を体験してみましょう。
音楽教育	本当の「声」と出会う～ヴォイストレーニング～	渡邊 史 (わたなべ あや)	音楽教育講座 (声楽)	児童・生徒(小4年～・中・高) 教員(幼・小・中・高・特) 保護者・市民一般 その他(企業社内研修、マナー講座等)	人間の表現ツール、コミュニケーション手段として「声」は重要な役割を担っています。 あなたの「声」の可能性を見つめなおしてみませんか? 発声ストレッチ、呼吸トレーニングを経て、身体を芯から使いながら「声」と向き合う時間です。歌に、そして朗読にも、ちょっとしたコツで生まれる大きな変化を楽しみにご参加ください。 その「声」を用いた歌唱表現まで踏み込むことも可能です。歌唱、合唱等のブラッシュアップにも、機会をご活用ください。

2 出前講座

英語教育分野

分野	題名	講師	講座	対象	内容
英語教育	人間の言葉の能力について:母語の獲得・外国語の習得と脳のはたらき	大嶋 秀樹 (おおしま ひでき)	英語教育講座 (英語科教育／言語心理学)	児童・生徒(小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) 市民一般	ことばの能力は、生き物の中で、人間だけが持つ能力です。 人間は、ことばを覚え、ことばを使ってコミュニケーションをします。 ことばの能力には、音声、語彙、文法、意味の領域で、脳の活動が大きく関わっています。 講義では、人間の持つことばの能力、ことばの能力と脳の働き、母語の獲得、外国語の習得について、最近の言及の知見にも触れながら、話を進めようと思います。
英語教育	アメリカ小説を読む	林 直生 (はやしなお)	英語教育講座 (アメリカ文学／アメリカ文化)	市民一般	詩や小説などの文学作品は、それ自体が独立して存在するのではなく、作家が作品を執筆した当時またはそれ以前の時代の社会や文化と密接な関わりを持っています。 この講義では、主に 20世紀前半のアメリカで書かれた小説を取り上げて、作品とその背景について見ていきます。
英語教育	言語学への招待	板東 美智子 (ばんどう みちこ)	英語教育講座 (言語学)	生徒(高) 教員(幼・小・中・高・特) 市民一般	・なぜひとはことばをもっているのか(言葉の起源) ・なぜひとは3歳ぐらいになるとことばをしゃべり始めるのか(普遍文法) ・アメリカ人の子供のように学習すれば日本人も英語がべらべらになるのだろうか(言語臨界期仮説) ・ことばのかたち・いみ・ならび(形態論・意味論・統語論) ・会話の意図は会話に出でこない(語用論)などについて紹介します。
英語教育	イマージョン教育と英語学習	田中 佑美 (たなか ゆみ)	英語教育講座 (英語教育学)	教員(小・中)	本講義では、イマージョン教育と英語学習、特に英語学習に対する動機づけについてお話しします。 イマージョン教育はカナダで始まった第二言語を使って理科や社会などの教科を指導するバイリンガル教育の一つです。 日本における英語によるイマージョン教育にも触れながら、英語を通して教科を学ぶことによる英語学習と英語学習に対する動機づけについてご紹介します。

美術教育分野

分野	題名	講師	講座	対象	内容
美術教育	子どもの絵の見方、描かせ方、造形遊びのすすめ方	新闇 伸也 (にいぜき しんや)	美術教育講座 (美術教育)	教員(幼・小・中)	子どもの絵の見方や描かせ方、また「造形遊び」の具体的な指導方法について、各学校園の先生方の課題に応じながら講義や演習を行います。
美術教育	入門アート～ラクガキからアール・プリユットまで～	藤田 昌宏 (ふじた まさひろ)	美術教育講座 (彫刻／現代美術)	児童・生徒(小4以上・中・高) 教員(幼・小・高・特) その他(福祉関連作業所など)	ラクガキを描くことから始めます。ラクガキを見せあいっこし、ラクガキの名作を鑑賞?し、そこから見えてくる表現の楽しさ・不思議さを感じてみてください。 そこからの展開は、「アールプリュット」「速写クロッキー」「エガオ絵」「目隠し彫刻」などなど、受講してくださる顔ぶれやリクエストでアレンジします。
美術教育	学びが深まる「造形遊び」(子供の主体な探究活動としての図画工作)	村田 透 (むらた とおる)	美術教育講座 (美術科教育)	幼児(4・5歳)・児童(1~6年) 教員(幼・小)	「造形遊び」は、準備や後片付けが大変で、抵抗があると思っていませんか? 「造形遊び」で、子供は楽しく意欲的だけど、「遊びの中に学びはあるの?」と思っていませんか?「個性的だよね」「いろいろあっていいよね」で、子供の「造形遊び」への評価を思考停止していませんか?「造形遊び」には、表現の多様性(現象)と学びの深まり(探究)があります。 現場で明日から実践できる題材体験を通して、「造形遊び」の学び・楽しさ、題材開発、指導や支援の在り方について学びます。
美術教育	グラフィックデザインの世界	世ノ一 善生 (よのいち よしお)	美術教育講座 (グラフィックデザイン)	生徒(中・高) 教員(小・中・高) 保護者・市民一般	グラフィックデザインでは、ポスターや新聞広告などの広告物、パッケージ、雑誌、書籍装丁など様々なものを対象としますが、これらの多くは大量生産されて消費されてゆきます。 しかしそのようなものだから、漫然と作られた価値の低いものという訳ではありません。ここでは図版資料を提示しながらその素晴らしさについてお話ししたいと思います。

2 出前講座

理科教育分野

分野	題名	講師	講座	対象	内容
理科教育	コミュニケーショントレーニング	加納 圭 (かのう けい)	理科教育講座 (科学コミュニケーション)	児童・生徒(中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) 保護者・市民一般	滋賀大学に通う大学生が授業に求めていること第1位(滋賀大キャリア通信:サンクス2013年1月7日号より)であった「コミュニケーション能力」の向上を目指したトレーニングプログラムです。科学の内容について「伝える・伝わる・分かち合う」ができるようになります。
理科教育	細胞をつくっている物質・脂質	糸乘 前 (いとのり さき)	理科教育講座 (生化学)	生徒(中・高)	生物を形作っている細胞は脂質でおわれた袋で、その外側には特有の成分が含まれています。その成分を調べることは、細胞にとってあるいは生物にとって重要な情報を与えてくれます。 本講義では「セラミド」などの、どこかで聞いたことのある脂質を含め、色々な生き物の脂質の話などどのように調べるかなどの話をします。
理科教育	太陽の科学	大山 真満 (おおやま まさみつ)	理科教育講座 (太陽物理学)	児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特)	太陽は、宇宙に浮かぶ平凡な星の一つに過ぎない。 しかし、地球に直接的に影響を与え、その姿を詳細に観測できる唯一の恒星である。この太陽に焦点をあて、最新の画像や動画も用いながら、太陽の素顔を紹介する。
理科教育	物理学におけるシミュレーション方法	神山 保 (こうやま たもう)	理科教育講座 (物理学)	生徒(高) 教員(高)	自然科学の研究は観測と実験を基礎にしていますが、両方とも難しい場合や、現象を理解するためにたてられた理論の検証にシミュレーションが使われます。 液体気体の相変化をはじめとする物質における様々な相転移に対するコンピュータシミュレーションの方法を紹介します。エクセルを使った誰でも簡単にできる方法もお話しします。
理科教育	物性物理学入門	恒川 雅典 (つねかわ まさのり)	理科教育講座 (物理学／物性物理学)	生徒(高) 教員(高)	「物性」といってもなじみが薄いかもしれません、実は「物性物理学」は素粒子・原子核・宇宙物理学と並ぶ分野の1つです。最新の科学技術を根底から支えている物質科学の中でも物質の成り立ちや現象などを、量子力学や統計力学などの物理的な考え方・手法の立場から研究するのが「物性物理学」です。本講義では、身近な例をあげながら「物性物理学」についてお話しします。
理科教育	私たちの化学	徳田 陽明 (とくだ ようめい)	理科教育講座 (無機化学／物理化学)	教員(小・中・高)	化学が私たちの暮らしをいかに豊かなものとしているかについて講習します。 また、小中高での学びがどのように大学に接続するのかについて酸とアルカリをテーマに説明します。準備や片付け(廃棄を含む)の簡単な化学の実験を体験して頂き、生活用品を使った実験についても紹介します。
理科教育	遺伝情報とは何か?	古橋 潔 (ふるはし きよし)	理科教育講座 (生物学)	生徒(高)	生命科学は近年目覚ましい進歩を遂げていますが、DNAと遺伝子の違いはおわかりでしょうか? この講座では遺伝情報がどのようなもので、どのように使われているかについて、身近な例を挙げて、しかし最先端の技術によって得られた知見も盛り込みながら説明します。
理科教育	多様な生物と生態的ネットワーク	服部 昭尚 (はっとり あきひさ)	情報教育講座 (生態学)	生徒(高) 保護者	生産者と消費者、分解者から構成される生態系に、なぜ多様な生物が存続しなければならないのでしょうか。 具体的に何種、絶滅する、生態系は崩壊するのでしょうか。観光地として人気のサンゴ礁に焦点を当て、多様な生物が構成する好循環のシステムを紹介しながら、生態系と生物多様性、そして絶滅の意味を考えます。

幼児教育分野

分野	題名	講師	講座	対象	内容
幼児教育	子どもの育ちと絵本	菅 真佐子 (すが まさこ)	幼児教育講座 (幼児心理)	児童・生徒(幼・小・中・高) 教員(幼)	絵本を読み聞かせてもらうことで、子どもは自らの内面世界を豊かに作り上げていくとともに、周りの人とつながることの楽しさやその大切さを感じていきます。 子どもの育ちとの関連で注目される絵本をいつしょに楽しみながら、子どもとの育ちと絵本の関係について考えてみましょう。
幼児教育	幼児期の遊びを豊かにする環境構成	山本 一成 (やまもと いっせい)	幼児教育講座 (幼児教育学)	生徒(高) 教員(幼・小)	幼児は遊びを通して様々なことを学んでいます。 そして、幼児が夢中になって遊ぶためには、子どもたちの遊びを可能にする環境が整えられていることが必要です。この講座では、子どもの遊びの大切さや、遊びにかかる環境の在り方について、理論と実践の両面から学んでいます。

2 出前講座

保健体育教育関係分野

分野	題名	講師	講座	対象	内容
保健体育教育	①ストレスと上手に付き合う方法 ②良質な睡眠とは	大平 雅子 (おおひら まさこ)	保健体育講座 (衛生学／健康科学)	児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) 保護者・市民一般	①誰もが聞いたことがあるストレスという言葉。その言葉の本来の意味を解説しながら、ストレスと「上手に付き合う」方法について様々な視点から考えていきます。 ②エビデンスに基づいて、良質な睡眠とは一体何かを考えていきます。
保健体育教育	生理学の基礎に基づいた効果的な運動・トレーニング	松田 繁樹 (まつだ しげき)	保健体育講座 (体力科学/生理学)	生徒(中・高) 教員(中・高) 市民一般	運動・トレーニングを行う際には、ヒトの生理的特徴や科学的知見に基づいた合理的なトレーニングをするべきです。本講義では、運動生理学の基礎を踏まえたうえで、効果的な運動・トレーニングについて考えてていきます。
保健体育教育	運動好きの子どもを育てる体育の授業づくり	山田 淳子 (やまだ じゅんこ)	保健体育講座 (体育科教育)	児童(幼・小) 教員(幼・小)	教師も子どもも運動が大好きになれる体育科の授業づくりを、実技や講義を通して学んでいただければと思います。 体育科の授業づくりのヒントとなる事柄を紹介していきます。 子ども向けにも模擬授業を行い、子どもも教師もともに学ぶ場を提供したいと思います。

技術・情報教育関係分野

分野	題名	講師	講座	対象	内容
技術・情報教育	金属材料のこれから	磯西 和夫 (いそにし かずお)	技術教育講座 (金属加工学／粉末冶金)	生徒(中・高) 教員(中・高) 市民一般	金属材料は最も多く用いられている材料の一つである。最近、既存の金属をしごぐ材料特性が求められている。 このような材料は溶解-塑性加工-切削による従来からの加工が不可能な場合が多い。その一解決法が粉末を用いた素材製造・加工・成形法である。粉末冶金法による材料開発と加工について解説する。
技術・情報教育	教育工学的手法を用いた教育環境の改善	岩井 憲一 (いわい けんいち)	情報教育講座 (認知科学／教育工学)	生徒(中・高) 保護者	教育環境は、慢性的な人材・予算不足等の問題から、これまで以上に質の高い教員の採用や情報ネットワークの導入による資源の共有、および、新しい教育手法の検討が求められています。 本講座では、これまで行ってきた学習指導案の電子化や情報ネットワーク環境等のICT導入事例を通じて教育環境の電子化について提案します。
技術・情報教育	一本の木から椅子をつくる	岳野 公人 (たけの きみひと)	技術教育講座 (技術教育／環境教育)	教員(幼・小・中・高・特) 市民一般	森林環境の有効利用の観点から、伐採から製材、椅子作りのプロセスをすべて人間の手でおこなう方法を紹介する。 米国では、グリーンウッドワーキングといい、日本の木地師が山にこもって、器づくりをしてきたころの技術と同様の伝統的な手法である。作業できる場所が確保できれば、実際の作業を体験するワークショップを開催することもできる。
技術・情報教育	多様な生物と生態的ネットワーク	服部 昭尚 (はっとり あきひさ)	情報教育講座 (生態学)	生徒(高) 保護者	生産者と消費者、分解者から構成される生態系に、なぜ多様な生物が存続しなければならないのでしょうか。 具体的に何種・絶滅すると、生態系は崩壊するのでしょうか。観光地として人気のサンゴ礁に焦点を当て、多様な生物が構成する好循環のシステムを紹介しながら、生態系と生物多様性、そして絶滅の意味を考えます。
技術・情報教育	宇宙の誕生と進化	穂積 俊輔 (ほづみ しゅんすけ)	情報教育講座 (天体物理学)	市民一般	宇宙はビッグバンという大爆発から始まったとされています。では、なぜそのような大爆発があつたことがわかったのでしょうか。さらに、「大爆発」とはガス爆発のようなものなのでしょうか。このような宇宙の誕生から始めて現在の私たちが見ている宇宙の姿を、人類の宇宙観の変遷とともに解説していきます。
技術・情報教育	動物の行動を真似るロボット	右田 正夫 (みぎた まさお)	情報教育講座 (認知科学／ロボット工学)	生徒(高)	外界からの情報を応じて、自ら適切な行動を選択できるロボットを総称して「自律ロボット」といいます。 自律ロボットが動作する環境はとても複雑ですが、さまざまな動物の行動様式を真似てロボットの行動をデザインすることでうまく対処できる場合があります。本講義では、そのような自律ロボットの研究事例を紹介します。
技術・情報教育	複雑系入門－フラクタルとは何だろう－	水上 善博 (みずかみ よしひろ)	情報教育講座 (コンピュータシミュレーション)	生徒(高)	海岸線や川の流れ、雲の形や木の枝ぶりなど、自然の造形には複雑な形をしているものが多く見られます。複雑な形をした图形の特徴を表す方法にフラクタルがあります。 本講義では、フラクタルという考え方を分かりやすく解説し、形の複雑さを知るための指標としてのフラクタル次元の求め方を学びます。

2 出前講座

学校教育関係分野

分野	題名	講師	講座	対象	内容
学校教育	カウンセリング マインドを育む	芦谷 道子 (あしたに みちこ)	学校教育講座 (臨床心理学)	教員(幼・小・中・高 保護者・市民一般)	さまざまなこころの問題が起こっている現代において、どのように人と関わればよいか、どのように子育てや子どもの心理的援助をすればよいか、悩みを抱えておられる方も多いこと思います。自己理解や他者理解のヒントとなるよう、カウンセリングの基本的な概念や、カウンセリングマインドについて、絵本や教材、体験を通して学んでいきます。
学校教育	記憶のしくみと 効果教授・学習	井上 毅 (いのうえ たけし)	学校教育講座 (認知・学習心理学)	教員(小・中・高・特)	認知心理学の観点から人間の記憶システムに関して概説したうえで、効果的な学習につながる教授・学習上の工夫についてお話しします。
学校教育	教師一生徒関係 の変容とこれから	太田 拓紀 (おおた ひろき)	学校教育講座 (教育社会学)	教員(幼・小・中・高・特) 保護者・市民一般	現在、教師と児童生徒との関係性における危機が広く叫ばれています。では、過去の教師と生徒の関係は良好だったのでしょうか。そもそも、問題視されはじめるのは、いつ頃からでしょうか。この講義では、わが国における教師一生徒関係の歴史的変化を概観し、その上で、今後の望ましい関係性のあり方について考えてみたいと思います。
学校教育	他者理解の コミュニケーション 心理学	蔵永 瞳 (くらなが ひとみ)	学校教育講座 (社会心理学)	教員(幼・小・特) 保護者・市民一般	人間は、他者とたくさんコミュニケーションをとりながら生活する生物です。本講座では、対人コミュニケーションのメカニズムとつまずきのポイント、人間が持つコミュニケーション能力の基盤である「他者の気持ちを理解する」力について、心理学の観点からお話しします。
学校教育	比較教育学で 教育を考える	児玉 奈々 (こだま なな)	学校教育講座 (比較教育学)	教員(幼・小・中・高・特) 保護者・市民一般	比較的教育学は、諸外国の教育事象を対象に教育と社会のつながりを考察する学問領域です。この講義では、現代の日本の学校で課題となっていることの諸外国における状況や各国の解決策を見ていきます。諸外国の教育事象の考察を通して、日本の学校の当たり前が海外の学校では当たり前ではないことに気づき、教育と社会のつながりを知り、さらには、人間にとって教育や学校はどんな意味を持つものなのか、教育や学校の本質について考えることを目指します。
学校教育	教育法規を読み解く	藤村 祐子 (ふじむら ゆうこ)	学校教育講座 (教育制度学)	教員(小・中)	教育法規は、教育の枠組みとなる重要な要素です。様々な教育改革が進められる中で、教育法規に目を通し、教育に何が求められ、どの方向に進もうとしているのか、改めて考えてみたいと思います。
学校教育	『エミール』を読む ～生きるための教育と 大人の役割について	三輪 貴美枝 (みわ きみえ)	学校教育講座 (教育学・教育哲学)	保護者	ルソーによって書かれた『エミール』は、人が教育をまさに「生きるために」必要とした時代のものであり、その思想は時代や文化の違いを越えて現代の私たちにも「生きること」の意味を考える材料を提供してくれます。それが書かれた時代状況等にも触れながら、「生きるための教育と大人の役割」について考えます。
学校教育	キャリア教育の 理解と推進	若松 養亮 (わかまつ ようすけ)	学校教育講座 (キャリア心理学)	教員(幼・小・中・高・特)	進路指導や就職指導と混同されがちなキャリア教育について、その出自や必要性、中教審答申に示された内容について解説し、具体的な推進方法や運営上の課題について、これまでの実践例にふれながらお話しします。
学校教育	子どもが「こころ」 に気づく時	渡部 雅之 (わたなべ まさゆき)	学校教育講座 (発達心理学)	教員(幼・小・特) 保護者・市民一般	幼い子どもたちは、自分自身の中にある「こころ」という存在を、十分に意識することができます。他の人間にも「こころ」があり、それが自分の「こころ」と同じ働きをしていることに気づくことで、他者への共感や理解が深まります。こうした「こころ」への気づきの発達過程についてお話しします。

2 出前講座

障害児教育分野

分野	題名	講師	講座	対象	内容
障害児教育	障害の原因と最近の話題	江原 寛昭 (えはら ひろあき)	障害児教育講座 (小児神経学)	教員(幼・小・中・高・特) 保護者	近年、遺伝医学などの研究の急速な進展により、病気や障害の原因の解明が急速に進展しました。 この講義では、それらの研究の成果を中心に、障害に関するトピックスを概説します。
障害児教育	ちょっとたちの発達と教育	窪田 知子 (くぼた ともこ)	障害児教育講座 (特別支援教育)	教員(幼・小) 保護者	私たちの身のまわりにいる“ちょっと気になる子どもたち(主に、発達障害の子どもたち)”のことをどう理解すればよいか?家庭や学校でどのような関わりをすれば、彼らの健やかな育ちを支え励ますことができるのか?保護者とうまく連携するには…?などのテーマについて、一緒に考えてみたいと思います。
障害児教育	障害のある子の発達と教育	白石 恵理子 (しらいしえりこ)	障害児教育講座 (障害心理／障害児教育)	教員(幼・小・中・高・特) 保護者	主として知的障害や発達障害をもつ子どもたちの発達と教育について考えます。 (発達の時期等については、ご相談に応じます。)
障害児教育	支援の必要な子どもと教育	羽山 裕子 (はやま ゆうこ)	障害児教育	教員(小・中)	通常学校に在籍する支援の必要な子どもたちは、学校生活のどこにつまづきを抱えがちなのか。どのような支援が可能なのか。一緒に考えていきたいと思います。
障害児教育	「気になる」児童・生徒の発達的理 解と支援	松島 明日香 (まつしま あすか)	障害児教育講座 (障害児心理)	教員(幼・小・中・高・特) 保護者	友達とトラブルになる、じっとしていられないなど、対人面や行動面において「気になる」児童・生徒の存在が注目されています。 その支援と対応には彼らの困難さを発達的に理解していくことが重要です。 本講義では、この時期の発達を通して「気になる」児童生徒の困難さをどのように理解し、対応していくべきかについて考えます。

家庭科教育分野

分野	題名	講師	講座	対象	内容
家庭科教育	何をどう食べる? -自分のための食べ物、食べ方-	久保 加織 (くぼ かおり)	家政教育講座 (食物学)	教員(小・中・高・特) 市民一般	誰もがいつでも食べたいものを食べられる現在であるからこそ、どの年代の人も自分の健康のためには何をどれだけどのように食べるのがいいか、きちんと理解しておくことが大切です。 様々な情報と食品表示が氾濫する中で、自分のための食材選びと食べ方について考えます。(具体的にどのような点に重点をおくかは、対象者に応じて相談させていただきます。)
家庭科教育	くつろぎの住まい	田中 宏子 (たなか ひろこ)	家政教育講座 (住居学)	児童・生徒(小・中・高) 教員(幼・小・中・高・特) 市民一般	住まいは、雨や風、暑さ・寒さや様々な過酷な自然現象から人々を守る役割があります。 また、そこで暮らす人々がゆっくりと休養し、エネルギーを蓄えるなど、住まいいは人々の心身の健康を維持する役割ももっています。これらの役割を果たすためにはどのような工夫が必要でしょうか、ともに考えてみたいと思います。
家庭科教育	家族の機能	平松 紀代子 (ひらまつ きよこ)	家政教育講座 (家庭經營学)	児童・生徒(幼・小・中・高) 教員(幼・小・中・高) 保護者・市民一般	家族の存在はどのような機能を果たしているだろうか。 社会で一番小さい組織(システム)である家族について、客観的に振り返り、時代、国、あるいは同じ時代に同じ地域に暮らしていても異なる家庭の文化にも目配りつつ、それぞれの価値観の違いをふまえ、それぞれの価値観を尊重することの大切さについてお話しします。
家庭科教育	衣生活と環境	與倉 弘子 (よぐら ひろこ)	家政教育講座 (被服学)	教員(小・中・高・特) 市民一般	環境問題に配慮した衣服の着装行動について解説します。 衣服による気候の調節と省エネルギー(暑さ寒さに応じた着方、クールビス・ワームビズなど)、有害紫外線と健康の関わりや衣服による紫外線対策について、衣服のリユース・リサイクルなど、環境保全に関わる衣生活の問題について考えてみましょう。

2 出前講座

環境教育関係分野

分野	題名	講師	講座	対象	内容
環境教育	湖沼の生態系	石川 俊之 (いしかわ としゆき)	環境教育講座 (湖沼生態学)	児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) 市民一般	湖沼の水の中には一見すると何もないように見えます。 しかし、そこには目に見えない小さな生き物が活躍する実に豊かな世界があります。琵琶湖を例に生物と生息環境の関係について考え、自然環境を大切にするためにできることを考えます。
環境教育	食料生産と環境	森 太郎 (もり たろう)	環境教育講座 (園芸学/植物病理学)	児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) 市民一般	私たちの生活に欠かせない食料生産と環境との関係について、食料生産は環境にどのような影響を与えているのか? 一方、食料生産は環境からどのような影響を受けているのか? の観点から講義し、持続可能な食料生産について考えます。

教職大学院担当教員関係分野

分野	題名	講師	講座	対象	内容
教職大学院	学校の危機管理	今井 弘樹 (いまい ひろき)	教育実践総合センター (学校管理)	教員(小・中)	今日、学校をとりまく環境には様々な危機が存在します。 特に学校における不祥事は、学校教育を根底から支える「信頼」を揺るがす大きな課題です。 自身が対応に関わったものや近年の事例から、事件・事故の発生前、発生直後、発生後の学校管理や取るべき対応について、具体的に分析・検証し、組織対応の内容や課題について考えていきます。
教職大学院	学校のビジョン形成と評価の手法	大野 裕己 (おおの やすき)		教員(主に小・中・高校)	今日の学校経営改革下で各学校に求められるビジョン形成やその評価の考え方・手法について、学校組織開発や内外連携構築と関連して整理・検討します(講義・演習・コンサルテーション)。 ※学校関係者評価や学校第三者評価実施への関わりについても、本務に支障のない範囲(年度数件程度)で対応できます。
教職大学院	幼児の健康と生活	奥田 援史 (おくだ えんじ)	幼児教育講座 (健康教育)	教員(幼) 保護者	幼児の健康と生活の関連について概説します。 また、「幼児期運動指針」(文部科学省)を解説します。
教職大学院	社会科の学力とパフォーマンス評価	岸本 実 (きしもと みのる)	社会科教育講座 (社会科教育)	教員(小・中・高)	社会科の思考・判断・表現の学力を身につけさせるために、パフォーマンス評価の指導と実践が求められています。 授業の中の15~20 分の中心活動、1時間そして1単元の授業など、生徒の思考・判断・表現のパフォーマンスをどのように指導し、評価すればよいのか、ワークショップ形式で考察します。
教職大学院	新しい時代が求める資質・能力を伸ばす教育課程・指導・評価	岸本 実 (きしもと みのる)	高度教職実践專攻 (教育方法学)	教員(小・中・高)	新しい学習指導要領により整理された、 新しい時代が求める資質・能力を伸ばすためには、 学校を基礎に教育課程を編成し、カリキュラムマネジメントを適切に実施していくことが求められています。 また単元や授業において確実にその資質・能力を身につけさせる 学習指導と評価の在り方が問われています。 本講座では、学校、学年、教科など学習者の状況に合わせて、これらの問題を考察します。
教職大学院	体育授業における指導と評価の一体化	辻 延浩 (つじ のぶひろ)	保健体育講座 (体育科教育)	教員(小・中・高)	子どもたちが学び合い育ち合う体育授業はどのように実現できるのか。いま教師に求められる考え方や指導性はどのようなものか、協同的な学びをどのようにデザインし、評価していくべきか等、学習集団づくりの理論と方法について考えていましょう。
教職大学院	算数・数学科の授業づくり	畠 稔彦 (はた なるひこ)		教員(小・中)	新学習指導要領を目指す「主体的・対話的で深い学び」について、事例をもとにワークショップ形式で考えます。

2 出前講座

分野	題名	講師	講座	対象	内容
教職 大学院	自然景観と自然災害／ 防災教育と学校安全	藤岡 達也 (ふじおか たつや)	理科教育講座 (科学教育／防災教育)	児童・生徒(小・中・高) 教員(幼・小・中・高・特) 市民一般	本講義では、次の3つのテーマを取り扱っています。テーマの選択等は可能です。 ①自然と人間との関わり(持続可能な社会とこれからの環境教育) ②自然景観の形成・活用と自然災害(国立公園・ジオパークと近年発生した自然災害など自然の二面性について) ③防災教育と学校安全・学校危機管理(子供を事件・事故災害から守るために)
教職 大学院	授業実践の事例研究	堀江 伸 (ほりえ しん)	学校教育講座 (教育方法学)	教員(小・中)	学校で授業研究を実際にされることを前提に引き受けることにしています。ひとりの教師や何人かの教師が、ある目的で授業研究されるのを参観し、その後の検討会に参加させていただくという形式です。その目的は、問いませんが、以下の教科に限らせていただきます。国語科、社会科、図工・美術科、道徳、総合の授業です。授業を改善するという目的でも、校内研究のテーマに即した授業研究でもかまいません。進め方などは相談に応じます。
教職 大学院	メディアと教育	松原 伸一 (まつばら しんいち)	技術教育講座 (メディア情報学)	教員(小・中・高) 市民一般	①「メディアの本質を科学する」、②「メディアの利用を実践する」、③「メディアの内容を吟味する」という3つの視点から、メディア教育の在り方について講義する。①では、いろいろなメディアを取り上げ、②では、コンピュータやインターネットなどの情報メディアや、e-Learning／WBL(ネットワークやホームページ利用の学習)などの教育メディアを取り上げ、③では、メディアリテラシーを取り上げて、講義を行います。
教職 大学院	家庭科教育の理論 と実際	矢野 由起 (やの ゆき)	家政教育講座 (家庭科教育)	教員(幼・小・中・高・特)	生涯にわたって自分らしく豊かな生活を送っていくためには、家庭科において何をどのように学べばよいでしょうか。ともに考えてみたいと思います。

3 教職探究講座

教職探究講座は、滋賀県内外の高校生を対象として、教員の仕事や子どもの発達特徴を理解することを通じて、教職への意識高揚を図ることを目的として実施されるものである。令和2年度は、残念ながら新型コロナウイルス感染拡大に伴って、高校から例年依頼を受けている教職関係の講座は中止となった。

また、この講座の重要なプロジェクトとして例年実施されている教職探究講座（東大津高校及び水口東高校）を令和2年12月11日、本学部大会議室で実施した。高校生41名と本学部在学生で各高校OBの参加があり、多角的に教職への意識を高める機会であった。具体的なプログラムは以下のとおりである。

【令和2年度教育実践総合センター連携講座「教職探究講座」（高大連携）】

- 1 目的 教職に対する理解を深めながらモチベーションを高め、進路（教職）に対する視野を広げ、その希望を確実なものとするために、東大津高等学校、水口東高等学校と連携して開催する。
- 2 対象 滋賀県立東大津高等学校、水口東高等学校1・2年生
- 3 主催 滋賀大学教育学部・滋賀県立東大津高等学校・滋賀県立水口東高等学校
- 4 期日 令和2年12月11日(金) 13:30～16:30
- 5 会場 滋賀大学教育学部 本館3階 大会議室

《プログラム》

- ◆開講式(13:30～13:35) 教育学部教育実践総合センター長挨拶 芦谷道子
- ◆第1講(13:40～14:10) 「教職への志が拓く教師の道」 (今井弘樹 准教授)
 - ・教職とは
 - ・人を教えること、人に教えることについて考える。
 - ・教職を志す上で大切なこと
- ◆第2講(14:15～14:45) 「授業とICT」 (岩井憲一 准教授)
 - ・教育におけるICT活用とは
 - ・教育の情報化にむけて
- ◆第3講(14:50～15:10) 「教育学部で学ぶとは」 (畠穂彦 准教授)
 - ・教育学部とは：各学校種の免許取得方法・他学部との違い（教育学部の独自性）
 - ・教育学部の可能性（就職）
 - ・先輩に学ぶ：東大津高校、水口東高校の卒業生OB・OGとの懇談交流会
「私が滋賀大で学んでいること、感じていること」（先輩からの話）
「先輩への質問と応答」（高校生からの質問）
- ◆第4講(15:20～15:45) 「学校における心理的問題への教師による対応」 (芦谷道子 教授)
 - ・現代の子どもたちが抱える心理的問題
 - ・子どもたちの心を育む教師の関わりと支援

3 教職探究講座

◆第5講(15:50～16:20) 「教師力の形成」 (大野裕己 教授)

- ・今なぜ教師力が求められているのか：教師力とは・求められるコンピテンシー
- ・教師力を高めるために：教師力の形成と大学での学び・学び続ける教師と教師力

◆閉講式(16:20～16:30) 修了認定証授与 (生徒代表) (司会：芦谷道子 教授)

学部長挨拶 神 直人

【参加した生徒たちの感想より】

- 今回大学に行かせてもらい、教師という職について身近に感じることができ、高い壁であるということも分かった。今まで一番身近に感じていた教職だが、先生方がこんな所まで見て仕事をしているのかと思った。実際にOBやOGの方に会い話を聞くことができ、大学で学べることや高校時代の勉強の仕方などを教えていただき大学について知ることができ今からもっと頑張らないと教師への道は開くことができないと思った。(1年男子)
- まずこの研修を終えて自信をなくしました。「教員」という職業のすごさがよく分かったからです。しかし同時にたくさんの魅力を感じました。自分にできるかどうか分からないことがたくさんあり、不安しかなかったけど、その不安が大学に向かって勉強しようと思う力にもなり、とりあえずたくさんたくさんこの研修でためになることを聞いて文章にうまくまとめられないくらいの感情を今日は抱きました。本当によい経験をさせてもらえ、大学の人には感謝しかないです。(2年生女子)



教育実践総合センター長の挨拶



講義の様子



OB・OGとの交流



修了認定書授与

4 教育臨床研究

1. 教育相談領域

これまで同様、非公開での相談業務を継続した。相談場所としては主に大学内にあるカウンセリング室と研究室（芦谷研究室）を用いた。今年度は、教員からの相談、コンサルテーションの依頼が20件、スーパービジョンの依頼が38件、本人や保護者からの教育相談依頼が3件、学生からの相談が15件あり、相談延べ件数（2月末まで）は76件であった。スーパービジョンとしてはグループを対象とした自治体への支援や、教員になった卒業生を対象としたもの、自治体や病院、大学心理相談室の心理師を対象としたものも実施している。平成28年度より継続実施している「野洲市ふれあい教育センター」での、適応指導教室、カウンセラーを対象としたスーパービジョン研修講師は4回行った。

今年度は新型コロナウイルス感染拡大により、子どもたちや保護者、教員、学生の不安が高まっており、その対策に伴う相談が増加したことが特徴であった。緊急事態宣言発令等に伴い、生活様式が変化し、抑うつや不眠といったメンタルヘルスの問題が深刻である事例も多くあった。直接会うことのできない対象には、オンラインによる面談も実施した。問題が深刻な事案に対しては、カンファレンスを開いて様々な専門家による対策チームを立ち上げ、継続的な支援活動を行った。学生からの相談においては、多重関係を避けるため、継続面接が必要な数事例については、基本的に保健管理センターに繋いでいる。保健管理センターは敷居が高いと感じる学生も多く、教員が必要な支援への繋ぎ手となることの意義を感じている。

さらに、滋賀県内の公立中学校より依頼を受け、全校生徒の抑うつ調査を年に2回実施し、学校内外のチーム学校による支援を実施して効果評価を行った。抑うつ度のスクリーニングにより、抑うつが高いと判断されてチーム支援の対象となった生徒において、抑うつの有意な低下が見られ、抑うつ調査によるスクリーニングと早期介入の有効性が確認された（文責：芦谷道子）。

2. 大津少年鑑別所との連携事業

2014年度より開始した、大津少年鑑別所と連携事業を引き続き実施し、鑑別所に入所している少年を対象とした学習教室に大学院生を派遣し、教養講話をしている。時間は一回30分～1時間ほど、頻度は1ヶ月に一度程度であり、通算49回（実施予定も含む）の実施となった。必要に応じて筆者が関係者と枠組みについて検討し、担当院生にスーパービジョンを行っている。鑑別所からは子どもたちに貴重な体験になると好評を得ており、また派遣講師にとっても貴重な学びの機会となっている。以下は担当した教職大学院生（M1益田雄大）からの実施報告である。（文責：芦谷道子）

（1）教養講話実施状況（受講者：各回1名）

第1回：7月29日、 第2回：8月19日、 第3回：9月2日、 第4回：9月30日、
第5回：11月18日、 第6回：12月9日、 第7回：1月27日、
第8回（予定）：2月10日、 第9回（予定）：3月

(2) 教養講話概要 【テーマ：楽しい算数】

〈内容〉小学校で習う算数の範囲の中で、興味を引くような課題を受講者と一緒に解決していった。受講者の学力にはばらつきがあったので、学力に応じた課題に取り組んだ。例えば、 $37 \times 12 = 444$ 、 $37 \times 21 = 777$ を示し、「どうしてゾロ目になるのか」を共に解決していった。計算が苦手な受講者もいたので、電卓を用意しておいた。

〈所感〉受講者は学力だけではなく、算数・数学への興味関心にはばらつきがあった。しかし、どの受講者にも課題への探究心を感じることができた時間となった。初めは、興味関心が薄かった受講者も課題に取り組むにつれて、「あれ?」「なんでだろう?」「ひょっとして…」と疑問を持ち、目を輝かせながら仮説を立て、検証するという姿が見られた。解決までは至らない課題もあったが、「算数の不思議さ」には触れられる時間になったと思う。講和後の感想文には「初めて算数を楽しいと思えました。」などと書かれており、どの受講者にも学ぶ楽しさを感じてもらえる時間になったと思う。つまり、「学ぶ楽しさ」は本来、学力には関係ないということを改めて感じた。学校に対する不信感や勉強に対するマイナスイメージを持っている受講者も少なくなかったが、受講する側の状態に限らずに「学ぶ楽しさ」を提供できた意義は大きい。

3. SKC キッズカレッジ（滋賀大キッズカレッジ）2020年度連携活動報告

～コロナ下の SKC キッズカレッジ～

(1) コロナ対策をして学習室継続

今年度は新型コロナ感染流行の影響で、学校が休校になるなどかつてない状況下での SKC キッズカレッジの出発でした。例年三月に行なわれていたキッズ最大のイベントである「お楽しみ会」を中止とし、マスク、消毒、換気、密にならない机の配置などの対策を講じて子どもたちの学習室への参加がどうなるかを心配しながらも発達障害のある子どもを家に閉じ込めてよいことはないと考えてキッズカレッジは開いておくことにしました。やはり、親の仕事が影響を受けたり、外出することへの不安から一時欠席したりする子どももいましたが、ほとんどの子どもたちはいつものように来てくれました。子どもたちの姿から、いろいろなストレスをため込んでいるな、という印象はありました。こういう時期だからこそ、キッズカレッジ学習室のような安心して自分を出せる場が必要とされていることを痛感しました。

(2) 2020 年度の相談の特徴

2020 年度は、相談者の年齢が年少と年長の両方向に広がったと言う特徴があります。就学前年長児が相談と検査を行なうことが増えてきました。これは、発達障害を就学前に把握し早期に対応することでかなりの改善があるということが保護者の間で理解されることが多くなったと言うことかも知れません。他方で、高校生・大学生の相談や成人の相談も増えてきました。これは、推薦入学などで進学はしたもの入学後単に取得で躊躇することになり、相談につながったということや成人の発達障害（学習障害）の相談とアセスメントをしてくれるところがなく、いろいろ調べたあげくキッズカレッジに「検査してもらえますか」とたどり着いたということなどがありました。高校生になるまで一度も相談や検査を受けていないと言う場合にはすでに二次障害が生まれ、大きな課題になっていることがあります。そのほとんどが小学校で把握できたと見られる状態です。発達障害分野の大きな課題です。

(3) 大学との連携

SKC キッズカレッジは、教育学部との連携協定・覚え書きに基づいて A 棟 207 の相談準備室と心理発達相談室（旧動物実験室）を利用し、多い時期と少ない時期がありますが、最近では週三日程度の相談と検査を行っています。また大学に対しては、2020 年度学生の卒論作成に協力し、2021 年度には SKC キッズカレッジスタッフが非常勤講師として授業を行うこと、キッズカレッジ学習室を教職員大学院学生の施設見学実習の場として提供する事がきまっています。

今後、さらに連携・協力の実績を積み上げていくことができるよう一層の努力を重ねていきたいと考えていますのでよろしくお願ひいたします。

(文責 : NPO 法人 SKC キッズカレッジ副理事長・滋賀大学名誉教授 窪島 務)

4. 予防教育開発実践事業

2016 年度より、予防教育開発事業に取り組み、滋賀県において「生きる力を育むモデル校」に指定されている公立小学校にて、英国で開発されたマインドフルネスの小児版である「.b プログラム」や、鳴門教育大学予防教育科学教育研究センターで開発された「いのちと友情の学校予防教育」（トップ・セルフ、TOP SELF: Trial of Prevention School Education for Life and Friendship）の実施などに取り組んできた。

現在、英国オックスフォード大学、MiSP (Mindfulness in Scholl Project)、関西医科大学心療内科学講座、MBSR 研究会と協力し、4 か年計画の「.b プロジェクト」に取り組んでいる。.b プログラムの教材の日本語版翻訳を終え、本年度には英国より講師を招聘して、.b Teacher を養成する予定であったが、新型コロナウィルス感染拡大により次年度に延期となった。

今年度は滋賀県内の私立高校野球部員 22 名に対して先行実施し、ストレスホルモンが実施前後で減少するなどの効果が得られた。また、生徒たちより「マインドフルネスと出会って、自分の心の落ち着かせ方やストレスをあまり感じない方法を知ることができた。」「短い間でも自分の性格、考えを知れた。続けていってもつと人間として成長をしていきたい。」などといった肯定的な感想を得た。

次年度は延期したプロジェクトを進め、英国より講師を招聘して、約 45 名の.b Teacher を養成し、養成された.b Teacher が各フィールドで中高生を対象にプログラムを実施し、効果評価を行う予定である。

(文責 : 芦谷道子)

5 情報教育研究

1. 事業名および担当者

毎年12月に本学部教育実践総合センターでは、滋賀大学の高大連携事業の一環として、滋賀県立高校の1、2年生を対象とした教職探求講座を実施しています。筆者もこの事業に講師として参加しました。本年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響で、例年二日にわたって行っていた講座を12月11日の一日のみに短縮して実施いたしました。本稿では、筆者の講演内容の概要についてご報告いたします。

事業名は「教育におけるICT活用とは」で、担当者は岩井憲一です。

2. 事業の目的

教育学部は、優れた教員を養成するというのが学部の主な目的の一つだと思いますが、必要なスキルとして、よりわかりやすい授業への取り組みが、さまざまな場面で必須となってきています。文献1によると「教科指導におけるICTの活用は、子供たちの学習への興味・関心を高め、分かりやすい授業を実現する上で効果的」であると述べられています。このことからも、子供たちの「確かな学力」を育成するためには、わかりやすい授業を実現することが必要であり、その指導方法の一つとして、教員が授業内でICTを効果的に活用していくことが重要となってきたと言えます。

そこで、教育におけるICT活用の探求が本事業の目的となります。以下では、この目的に沿った事業の概要につきましてこの場をお借りしてご報告したいと思います。

3. 事業の概要

3.1 文部科学省のWebサイトの重要性について

あらためて言うまでもないことですが、教育は我が国の発展と国民の育成に不可欠な最重要施策であると言えます。このため文部科学省では分割統治の観点からある一定の指針を全教員に周知させる必要があります。そのような取り組みについては、現在では同省のWebサイトを眺めるだけで、国としてどのようなことに重点を置いているのかなどの情報を簡単に手に入れるすることができます。本講演ではまずその話から始めました。

ICTには学習に対する理解を促す効果がある[1]ことから、実際にICT教材を用いた例を挙げました。具体的には、文献2のデータである図1の「ICTを利用した情報活用の例」を挙げて、有効な戦略を受講生のみなさんと共に検討しました。

3.2 ICTの教育への導入について

ICTを教育に導入するためには、まずは教育活動や教科の分析が必要となります。教育活動については、ここでは狭義として授業の大まかな流れとお考え下さい。この教育活動や教科を情報学の観点で分析して記述する「情報化」を行います。その情報化が進めば、ICTの導入もある程度容易となります。

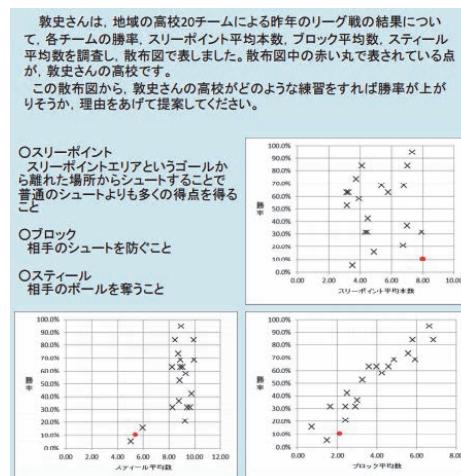


図1 ICT分布図を利用した情報活用の例
(文献2より引用)

3.3 ICT 活用に伴う教材や学習形態について

次に ICT を活用する上で相性のいい教材の例と効果的な学習形態について紹介しました。具体的には相性のいい教材の例としては、

- ・ 動画(マルチメディア)コンテンツ(図 2 参照)
- ・ IoT、ロボットカーなどのプログラミング学習

を紹介しました。このうち前者について少し紹介しますと、こちらについては反転学習もしくは予習復習の教材として、YouTube や LMS(Learning Management System)で利用される場合が多いです。自分のペースで観ることができますので、慣れると「速読」ができます。再生時間を 1 分程度にしておきますと、苦手な科目の内容でも我慢しやすく、空き時間、待ち時間を利用して視聴できます。このようなコンテンツはマイクロコンテンツと呼ばれますが、短い分、繰り返し見ることで意味を理解することが容易となり、内容が理解しやすくなります。また、クラスの同級生と一緒に取り組むことで、実際に使うと教材の内容を理解できた受講生の口コミで他の同級生が取り組むのを後押しします。

ICT が効果的な学習形態の例としては、次のようなものを紹介しました。

- ・ アクティブ・ラーニング：学習者が能動的に学ぶ形式
- ・ 反転授業：あらかじめコンテンツを学んでおき、授業時にはそれを基に授業を実施する形式
- ・ 個別学習：一人一人の子供たちの能力や特性に応じた形式
- ・ 協同学習：子供たちが教え合い学び合う形式
- ・ 自立支援学習：特別な支援が必要な子供たちに障がいの状態や特性等に応じて活用する形式

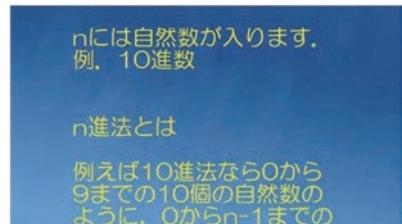


図 2 動画コンテンツの例

3.4 筆者のこれまでの取り組みについて

最後に筆者のこれまでの取り組みについて紹介しました。いくつか例を挙げますと、数学の公理に基づいて足し算を再定義してシステム化した教材の例や、品詞分析を行うシステム教材の例などを挙げました。

4. 今後に向けて

本稿では、「教育における ICT 活用とは」と題して、本年度の教職探求講座における筆者の講演内容について紹介しました。また来年度もお話しする機会がございましたら、受講生のみなさんにとって少しでも教員を志すきっかけになれるように頑張りたいと思います。

参考文献

- [1] 文部科学省, “令和元年度 文部科学白書 第2部 文部科学技術施策の動向と展開 第11章 ICTの活用の推進”, 2020, https://www.mext.go.jp/content/20200731-mxt_kouhou02-000009140_19.pdf (2021年2月6日アクセス).
- [2] 文部科学省, “情報活用能力調査（高等学校） 報告書”, 2018, https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/detail/_icsFiles/afieldfile/2017/01/18/1381046_02_1.pdf (2021年2月6日アクセス).

6 教育実習支援（その1）

教育参加カリキュラムは、平成17年に始まり、今年で16年目を迎える。1年次の「教育参加プランニング」「事前観察」、2年次の「基本実習事前学習」「交流実習」、3年次の「基本実習（教育実習）」「教育実習中間指導」「教育実習終了後（3年次の秋学期と4年次）の発展実習」「自主参加体験」という滋賀大学のすべての教育参加カリキュラムを、原則として4年間で積み上げ式に体験するプログラムである。特に、地域実習（平成17年から始まった栗東実習、平成25年度から始まった守山実習、平成30年度から始まった大津実習、令和2年度から始まった草津実習）は、「地域の公立学校における教育支援活動を通して実践的力量を高める」という目的に則り、実習校、教育委員会、大学とが連携して行っている。

1. 教育参加プランニング

1回生の教育参加プランニングは、グループ学習を通して将来の目標を設定し、これから4年間の学びを計画させるものである。プランニング作業は、個々の学生の立場から、教育参加カリキュラムにおけるそれぞれの実習の位置づけを明確にし、目的意識と見通しをもって、充実した学生生活を送るための一助となるものである。

2. 事前観察

事前観察は、交流・基本実習の事前指導として、附属学校での授業参観等（事前観察）を行う、1回生の活動である。交流・基本実習を行う前に附属学校の日常に触れ、教員としての心構えや学校の現状を体感する機会になっている。

3. 交流実習

交流実習は、学校行事等における準備や運営に、指導者の立場から体験的に関わる実習である。交流実習で、2回生は、小学校では校外体験や運動会、中学校では体育祭や合唱コンクール（文化祭）等の指導補佐を行っている。先生方や児童生徒とのふれあいを通して、先生方が学校行事等を、どのように準備し、どのような配慮をしながら実施しているのかを実践的に学んでいる。

4. 基本実習

3回生になると、交流実習を行った学校で4週間の基本実習を行う。具体的には、児童生徒の生活指導、授業観察、（研究）授業、一日担任などである。基本実習では、個別の児童生徒の対応にとどまらず、クラス全体を視野に入れて、児童生徒との関係を作っていくこと、授業を進めていくことが求められる。また、多様な児童生徒や様々な課題を抱えた児童生徒と向き合うことでより具体的な対応を学ぶことができる。



地域実習校での教育実習

5. サポーター活動（自主参加体験・発展実習）

地域実習では、基本実習の事前・事後指導の一環として、基本実習の配属校で3年次の3月まで原則として週1回のサポーター活動を行う（栗東実習3回生は全員必修、他は希望者のみ）。基本実習前のサポーター活動は、児童生徒や先生方との関係をつくることに重点を置いている。それを活かして、6月から10月までの実習期間中での、児童生徒との信頼関係の形成、担当教員との授業の打ち合わせ、授

6 教育実習支援（その1）

業の打ち合わせ、授業構想・指導案の確認等を行っているので、基本実習のために欠かすことのできない活動となっている。基本実習修了後の活動は、基本実習で学んだ成果を活かして児童生徒や先生とより深く関わり、学校の教育活動に積極的に参加することを目的としている。なお、基本実習前と実習期間中のセンター活動は、自主参加体験として、実習後のセンター活動は、発展実習として単位申請することができる。また、学生が希望すれば、基本実習の配属校で4年次になってもセンター活動を続けられる。

6. 大学の支援体制

学生への支援体制は多岐にわたっているが、代表的な支援は、以下の3点である。

1つ目は、実習中の支援である。地域実習では、栗東・守山・大津・草津実習担当の学部教員が、学生の授業を参観したり、学生から実習の様子を聞いたりして、技術面・精神面への支援を行っている。また、基本実習を行う3回生には、第1ステージ（6月）と第2および3ステージ（9・10月）の間に、教育実習中間指導を実施している（令和2年度は、コロナウイルス感染防止の観点から、9・10月に実施）。教育実習中間指導では、それぞれの実習校での経験を語り、共有することで、前ステージの課題を見つけ、次ステージに向けての目標を明確にすることをめざしている。

2つ目は、実習後の支援である。基本実習と教育参加プランニングが終了する頃に、各専修専攻毎に教育実習報告会を開催している。3回生が基本実習の成果を発表し、それぞれの経験を振り返る機会を提供している。また、1回生と2回生は、上回生の発表や彼らとの意見交流を通して、次に行う実習の情報を得ることもできる。

3つ目は、センター活動への支援である。スクールセンターでは、運動会や音楽会といった学校行事の準備や手伝いといった、日頃は経験をしない、裏方的な仕事を行うことになる。そのことにより、授業という児童生徒の前で行うことだけでなく、陰で支える仕事の存在を知り、互いの思いやり、感謝、協力の心を学び、チーム学校の大切さを体感するのである。地域実習生だけでなく、附属実習の学生にもその機会を知らせ、紹介する支援も行っている。

7. 今後にむけて

今後、重点的に取り組むべき課題は、次の4点である。

第1に、今後、副免実習を行う学生が増える中、少しでも多くの実習生がスムーズに実習が受けられるよう地域実習校との連携を深めていく必要がある。

第2に、学生の豊かな経験を深めるために、地域実習校の受入体制や大学のサポート体制を洗練させ、センター活動がさらにしやすい環境を整えることである。

第3に、教師になるまでの、4年間の大学生活の間に、どのような学習をして、どのような力をつけるなければならないのか、そのために、具体的に何に取り組めばよいのかといった情報を提案すること。また、学生がプランニングをしやすくするためのきめ細やかなサポートを行うことである。

第4に、教師という仕事のすばらしさや、やりがいを実感させ、教師という職業への意欲を高めさせることにある。

（水野 裕美）

7 教育実習支援（その2）

教育参加カリキュラムを円滑に取り組めるよう、1回生で行う事前観察のための事前指導、3回生の基本実習のための事前指導（2回生で実施）基本実習後の事後指導（3回生で実施）、4回生では教職実践演習をおこなっている。

1. 事前観察のための事前指導 12月4日

各校園での観察実習日

中学校：令和3年5月13日、小学校令和3年6月14日 幼稚園令和3年3月1日2日

特別支援学校 令和2年度内に実施予定

【内容】

1	16:00～	これからスキル向上の計画について
2	16:15～	授業を行う上で大切に思うこと
3	16:30～	指導上の留意点について、観察記録のとり方
4	16:50～	ふりかえり、まとめ、連絡事項

2. 基本実習のための事前指導（教育実習基礎）10月8日～11月5日

A. 本指導について

「教育実習基礎」の受講を教育実習の履修条件に位置付け、実習参加予定者全員が必ず受講する。

B. 「教育実習基礎」の指導について

（1）教育実習につなぐために必要な指導内容

①授業づくりと教材研究についての講義

（授業の構想と授業のイメージ：指導計画と授業過程）

②指導案の大切さと指導案の様式、指導案の書き方の具体についての講義

（指導後、指導案作成に係る課題を提示・・・中学校は各教科）

③模擬授業の学習指導案および教材等の作成（各グループごとに集まって作業）

④模擬授業の実施と指導Ⅰ（模擬授業および指導案に関する指導）

⑤模擬授業の実施と指導Ⅱ（ 〃 ）

（2）指導の場と時間の確

		指導者	令和2年度実施日
A	来学指導1・・・①と②を指導	附属教員	10月8日(木)、10月29日(木)
B	グループ作業・・・③の活動	大学教員	10月15日(木)14:30～17:00 11月5日(木)14:30～17:00
C	来学指導2・・・④⑤を指導	附属小教員	10月22日(木)14:30～17:00 2月19日(金)、22日(月)
D	来学指導3・・・④⑤を指導	附属中教員	11月26日(木)14:30～17:00 12月10日(木)、24日(木) 1月21日(木)、2月18日(木)

3. 基本実習後事後指導 11月12日、26日

【テーマ】 実習を通した成果を振り返り、改善と協働できる教師を目指す

【内容】 ・教育実習を手掛かりに振り返り思考と改善の態度ができるようになろう

・仲間と協働し、仲間同士で育ちあう機会にしよう

【日程】 14：30～14：40 はじめに

14：40～15：10 自己評価書への記入

15：20～16：50 「実習を終えて」グループ協議

課題1：「教育実習で何を学び、何が自分の課題になったのか」

課題2：「実習を終え、教職への志向・迷いとこれからの自分の生き方」

16：55～17：25 グループ別協議の報告 キーワードで

大講義室：1班から23班

中講義室：24班から44班 第1講義室：45班から52班

4. 学級担任実践研修 2月1日～3月31日（リモート形式）

教職を目指す4回生の指導として具体的な教育活動を想定とした学級担任研修をおこなった

【内容一覧】

① 学級づくり

朝の会・帰りの会、係活動、掲示物

児童・生徒理解及び生徒指導

② 保健指導、特別支援計画の作成

③ 保護者対応、連絡帳の返信

④ 所見の書き方

⑤ 4月8日の週の仕事

⑥ 個々の学生との面談



本年度1回生から4回生まで教育参加プログラムを見据えた事前指導や事後指導を行ったが、何よりどの指導も学生に意欲を持たせること、ビジョンや見通しを持たせることに配慮した。本年度コロナの影響でリモート形式での方式を取り入れ、指導案を実際に作成させてのぞませることで机上の議論にはならないように工夫した。グループ協議などで課題についてそれぞれの卒業までのスパンの中で何をすればよいのかも感じさせることができた。課題として個々の学生によって思いや捉え方が違うので少人数での対応や、いつでも相談できる教育相談的な機会も学生にはサテライトとして必要と感じた。次年度も指導の内容の更新と指導の工夫改善に留意していきたい。

(狩野 秀樹)

8 教職キャリア支援の取り組み

1. 事業名および担当者

事業名：キャリア支援事業

担当者：学部教員 杉野 澄子

2. 事業の目的

大学での学びを支援し、就職相談を中心とした進路支援（キャリア支援）を行う。対面指導とオンライン利用による指導により、教員採用試験、その他の就職対策について指導助言する。

3. 事業の概要

1) 取り組み

① 新入生対象 キャリア支援の案内とキャリア支援アンケートの実施

1年生全員の個人あてに、オンライン success のシステムにより「キャリア支援の案内」と「キャリア支援アンケート」を送付し、各個人から調査回収を行った。特に、今年度は、例年のように対面によるグループ面談ができないなかで、新入生の本学入学理由や大学生活の満足度、進路（教職）希望の実態把握をし、学内の情報共有をした。

今年度は、コロナ感染症対応でキャリア支援室訪問による相談が難しい状況において、進路（就職）関係などの相談の受付、オンライン相談の（ZOOM、メールなど使用）案内をした。

② 教職採用試験対策の指導

a 就職委員会主催の事業に協力参加する。

- ・就職・教職ガイダンス（4回生対象）teams にパワーポイント資料掲載（説明）
- ・教員養成研修（4回生対象）teams にパワーポイント資料掲載（説明）・現職教員と学生の交流会（学生オンライン）参加
- ・集団面接練習（4回生対象）ZOOM によるグループ集団面接練習を行い指導助言
- ・二次対策面接練習（4回生）teams による直前面接練習を行い指導助言
- ・集団討論スタート面接練習会（3回生対象）teams にパワーポイント資料掲載（説明）と集団面接討論会の練習を行い指導助言

b 個別指導

- ・小論文指導（メールによる小論文予想課題問題を提示、ワード文書で提出を受け、添削指導して返送し、指導助言を行う）
- ・個人面接指導（対面およびZOOMによる教職対策・講師登録など個人面接指導を行う）
- ・面接カードなどの記入指導（メールによる文章提出を受け、アドバイスを行う）
- ・模擬授業の相談・練習、指導助言

③ 進路相談・就職相談

- a 希望者対象。教職採用試験の受験についての迷いや他の就職採用試験の受け方についての相談。公務員試験、企業採用試験の受験対策の助言、エントリーシート記入助言を対面指導およびオンライン（メールやZOOM 利用）により行う。
- b 本学経済学部就職係への協力依頼の連携をする。（就職相談・企業説明会など）
- c 教員採用試験や他の就職試験関係の情報収集と整理
- d キャリア支援全般に関する研究

8 教職キャリア支援の取り組み

2) 新入生対象アンケート調査結果

問1 あなたが本学へ入学した理由は何ですか。 (1つ選択)

- 1 教職を目指しているから 2 入試難易度や受験科目などが自分にあっていましたから
3 国立大学法人だから 4 親や高校の教師などが勧めたから 5 理由はない 6 他

回答\年度	平27	平28	平29	平30	令和元	令和2年
1	65.3%	68.7%	71.9%	67.2%	55.2%	68.6%
2	10.5%	9.6%	8.7%	12.4%	19.9%	15.9%
3	14.9%	13.7%	11.6%	9.5%	16.6%	8.8%
4	4.8%	4.4%	4.1%	6.2%	5.4%	4.4%
5	0.8%	0.4%	0.8%	1.2%	1.2%	0.9%
6	3.6%	3.2%	2.9%	3.3%	1.7%	1.3%

問2 あなたは本学での大学生活に満足していますか。 (1つ選択)

- 1 大変満足している 2 ほぼ満足している 3 やや不満である 4 大いに不満である

回答\年度	平27	平28	平29	平30	令和元	令和2年
1	37.1%	25.7%	24.8%	33.6%	29.9%	4.4%
2	57.7%	69.5%	67.8%	61.0%	63.9%	49.1%
3	4.4%	4.8%	7.4%	5.0%	5.4%	40.7%
4	0.8%	0%	0%	0.4%	0.8%	5.8%

* 今年度の大きな特徴は満足度が低く、不満に感じている者が半分近い。(理由は複数回答)

- ① 満足+ほぼ満足の理由 : 1 講義に関する事(83人) 2 進路に関する事(59人)
3 部活や人間関係(24人) 4 施設・設備(11人) 5 バイトなど(17人)
- ② やや不満+不満の理由 : 1 講義に関する事(59人) 2 進路に関する事(15人)
3 部活や人間関係(22人) 4 施設・設備(8人) 5 バイトなど(10人)
6 記述(34人:コロナ感染症対応で学校に行くことができない。オンライン授業で対面授業でない。先生・友人との交流がない。大学生活が十分できていない。)

問3 現時点であなたの教職を目指す気持ちはどの程度ですか。 (1つ選択)

- 1 ぜひ教職を目指したい 2 できるだけ教職を目指したい
3 教職以外を目指したい 4 どうするか決めていない

回答\年度	平27	平28	平29	平30	令和元	令和2年
1	58.9%	66.3%	66.9%	56.0%	54.8%	62.4%
2	32.3%	23.7%	26.9%	31.1%	32.8%	24.8%
3	3.2%	2.8%	2.1%	6.6%	4.1%	4.9%
4	5.6%	7.2%	4.1%	6.2%	8.3%	7.9%

4. 今後に向けて

使命感と意欲にみちた教員の育成と希望の就職に向けた指導助言によるキャリア支援を行う。

(杉野 澄子)

9 業務報告

9 業務報告（春学期）

	教職キャリア教育支援	教育実習支援	共同研究・年報
4月	<ul style="list-style-type: none"> ・新入生対象ガイダンス諸準備・実施方法協議検討 ・キャリア支援データ作成 ・教員採用試験問題研究 ・遠隔授業研修（視聴） ・教育採用試験対策 ・小論文添削指導 	<ul style="list-style-type: none"> ・学生面談 ・市教委挨拶（草津、大津） ・教育実習委員会 ・学生面談（ZOOM） ・学生指導 	<p><事務></p> <ul style="list-style-type: none"> ・年報第2号HP掲載
5月	<ul style="list-style-type: none"> ・教育採用試験対策 ・小論文添削指導 ・新入生対象ガイダンス実施方法の検討、アンケート作成 ・遠隔指導用ZOOM・Teamsなどの準備 	<ul style="list-style-type: none"> ・学生指導（メール） ・学生面談（ZOOM・メール） 	
6月	<ul style="list-style-type: none"> ・新入生対象キャリア支援案内とアンケートをSUCCESSで実施 ・教員採用対策集団討論 ・集団面接の準備、資料作成 ・教員採用対策集団討論 ・面接の実施（ZOOM使用） ・進路相談 ・教員試験対策 ・小論文添削指導 	<ul style="list-style-type: none"> ・学生面談（ZOOM） 	<p><事務></p> <ul style="list-style-type: none"> ・共同研究の募集（締め切り7/16）
7月	<ul style="list-style-type: none"> ・新入生対象キャリア支援アンケート回収・集計 ・分析資料作成 ・キャリア支援 ・進路相談案内（SUCCESS） 	<ul style="list-style-type: none"> ・学生面談（ZOOM） ・草津市、栗東市内実習校挨拶日程連絡、挨拶 ・地域実習オリエンテーション ・第2回教育実習委員会 ・合格者から連絡 <p><事務> 旅費申請</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・共同研究審査 <p><事務></p> <ul style="list-style-type: none"> ・共同研究締め切り7/16 ・共同研究応募の一覧作成と採択通知7/21
8月	<ul style="list-style-type: none"> ・教員採用対策 ・個人面接指導（ZOOM） ・教育二次試験対策 ・集団面接指導（teams） ・進路相談 	<ul style="list-style-type: none"> ・学生面談 ・実習オリエンテーション ・実習基礎 ・草津市内実習挨拶・交流校訪問 ・守山南中次週事前訪問 ・守山栗東教育実習訪問 <p><事務></p> <ul style="list-style-type: none"> ・旅費申請 	
9月	<ul style="list-style-type: none"> ・進路相談 ・就職ガイダンス ・教員養成研修資料作成（パワーポイント） ・令和2年度、実施教員採用試験 ・学生報告書まとめ（資料作成） 	<ul style="list-style-type: none"> ・教育実習訪問（栗東・守山・大津） ・栗東市教育委員会挨拶 ・草津市交流実習打合せ訪問 <p><事務></p> <ul style="list-style-type: none"> ・旅費申請 	

9 業務報告

	教職実践講習 教職探究講座	出前講義・校内研究	滋賀県総合教育 センターとの共同研究
4月		<p><事務></p> <ul style="list-style-type: none"> ・講師依頼について担当教授に連絡（通年） ・問い合わせについて回答（各担当より） ・ファイリング 	<ul style="list-style-type: none"> ・トータルアドバイザーとして連携窓口を担当（通年）
5月		<p><事務></p> <ul style="list-style-type: none"> ・出前講義の加筆・修正等 ・HP更新 「2020年度 出前講義一覧」5/20 	
6月			
7月		<p><事務></p> <ul style="list-style-type: none"> ・コロナの影響により8月まで講師派遣を中止とする。 ・今年度の講師派遣は、県内に限定とする事をHPにてお知らせした。 	
8月		<p><事務></p> <ul style="list-style-type: none"> ・9月以降についても、コロナの状況に応じて個別に判断していくことをHPへ掲載した。 	
9月			

9 業務報告

(秋学期)

	教職キャリア教育支援	教育実習支援	共同研究・年報
10月	<ul style="list-style-type: none"> ・令和2年度実施教員採用試験 問題より研修資料作成 ・就職・教職ガイダンス、教員養成研修、講義録音作成 	<ul style="list-style-type: none"> ・実習基礎【小】 ・栗東・大津・守山教育実習訪問 ・学生面談 ・教職実践演習 ・精道中スクサポ依頼訪問 <事務> ・旅費申請 ・事後指導アンケート作成(SUCCESS) 	
11月	<ul style="list-style-type: none"> ・教員養成研修(現職教員との交流会) ・就職相談 ・教員採用対策・模擬授業対策 ・創造学習センター(ALC)就職関係書籍 ・問題集(蔵書確認集計) 	<ul style="list-style-type: none"> ・実習基礎【中】 ・1回生プランニングVTR撮影 ・守山南中授業訪問 ・事後指導(3回生) ・学生面談 ・第3回教育実習委員会 <事務> ・事後指導アンケート結果集計、グラフ作成 ・3回生事後指導II講義資料作成(P.P.) 	
12月	<ul style="list-style-type: none"> ・就職相談 ・就職関係書籍選定資料作成 ・教員採用対策 ・模擬授業指導 ・面談資料作成 	<ul style="list-style-type: none"> ・3回生事後指導(補講) ・第2回栗東連絡協議会 ・観察実習オリエンテーション ・学生面談 ・守山実習連絡協議会 <事務> ・1回生プランニングアンケート結果集計 	<p><事務></p> <ul style="list-style-type: none"> ・年報、HPへ掲載。(2018年度から2019年度分)
1月	<ul style="list-style-type: none"> ・3回生スタートアップ事業用 ・資料作成と講義 ・各種記録等の整理 	<ul style="list-style-type: none"> ・栗東市実習校人数確認 ・草津市教委来年度を説明 ・草津市実習連絡協議会 ・3回生事後指導(補講) ・第4回教育実習委員会 ・令和2年度まとめ 	<p><事務></p> <ul style="list-style-type: none"> ・年報の原稿依頼(共同研究事業、センター業務) ・年報の原稿依頼
2月	<ul style="list-style-type: none"> ・キャリア支援移転 ・資料等整理 ・3回生スタートアップ集団討論練習実施 ・就職相談 ・進路相談 	<ul style="list-style-type: none"> ・学生面談 ・令和3年度実習計画立案 	<ul style="list-style-type: none"> ・年報の原稿(初稿)締切 2/12
3月	<ul style="list-style-type: none"> ・3回生集団討論練習実施 ・次年度侵入生対象ガイダンスの実施方法検討・準備 ・就職相談 ・進路相談 	<ul style="list-style-type: none"> ・学生面談 ・学級担任実践演習 ・令和3年度実習計画立案 	<p><事務></p> <ul style="list-style-type: none"> ・年報HP掲載前の確認 ・年報HP掲載

9 業務報告

	教職実践講習教職探究講座	出前講義・校内研究	滋賀県総合教育センターとの共同研究
10 月	・教職実践演習 10月15日（今井先生）		
11 月	<事務> ・教職探求講座、原議書提出11/6 ・参加学生の認定証作成 ・教職探求講座OB参加学生募集 ・各講義資料印刷		
12 月	<事務> ・教職探求講座施12/11 <事務> ・教職探求講座前日準備 ・教職探求講座開催について実践センターHPに掲載 12/15 ・教職探求講座OB・OG参加いただいた学生へお礼		
1 月			
2 月		<事務> 令和2年度、出前講座講師派遣一覧作成	
3 月		<事務> ・出前講座にご協力いただいた先生方へお礼	

教育実践総合センター年報 第4号
2021年3月発行
滋賀大学教育学部 教育実践総合センター
〒520-0862 大津市平津二丁目5番1号
TEL 077-537-7993(直通)
FAX 077-537-7909
<https://www.edu.shiga-u.ac.jp/cerp/>

